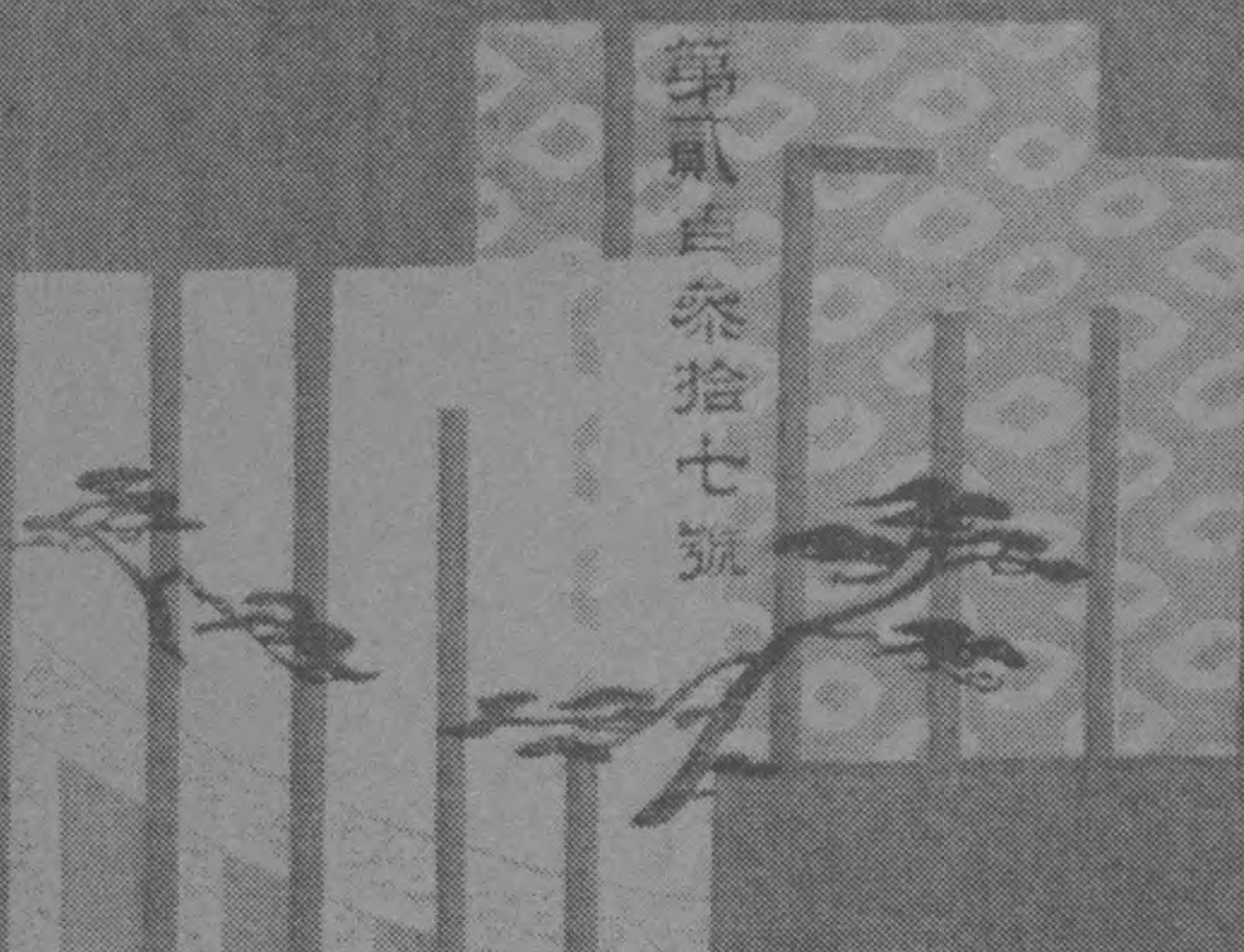
〔明治二十四年八月十二日第三種郵便物認可〕

明治三十四年九月二十四日發兌

女鑑



女鑑第貳百參拾七號

目録

定價
一册 金拾錢
六册 三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册 半年分 前金壹圓拾錢
廿四册 一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十四年九月十九日印刷
明治三十四年九月二十日發行

編輯兼發行人 川崎直衛
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人 並木眞雄

發行所 國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地

發賣元 靜思館
(電話本局一千三百七番)

社告

從來各所より御寄贈にかゝる新刊新聞雜誌及圖書等單に國光社とのみ御認めの分は往々當部へ着せず爲に折角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚だ御手數ながら以後必ず國光社女鑑編輯部へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

東京京橋區築地貳丁目廿一番地國光社內
女鑑編輯部

稟告

本誌（女鑑）編輯に關する即ち原稿投書等の事件は必らず女鑑編輯部へ御送被下度候又發賣に關する總ての事件は必らず靜思館へ宛御發信被下度願上候也

東京京橋區築地二ノ廿一、國光社內
女鑑編輯部（電話新橋八十八番）

東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館（電話本局千三百七番）

本誌定價改正

壹册代金拾錢
六册代前金（三ヶ月分）五拾七錢
拾貳册代前金（半ヶ年分）壹圓拾錢
廿四册代前金（一ヶ年分）貳圓拾錢

全國無遞送料

本月より右の通相改め申候尤是迄前金御拂込濟の分は從來の定價に據り候也

明治卅四年九月

女鑑發賣元
靜思館

紫式部

めくり
あひて見しや
それとも
わかぬまに雲かくれにし
よはの
月かけ
かな

日本赤十字社醫長正五位

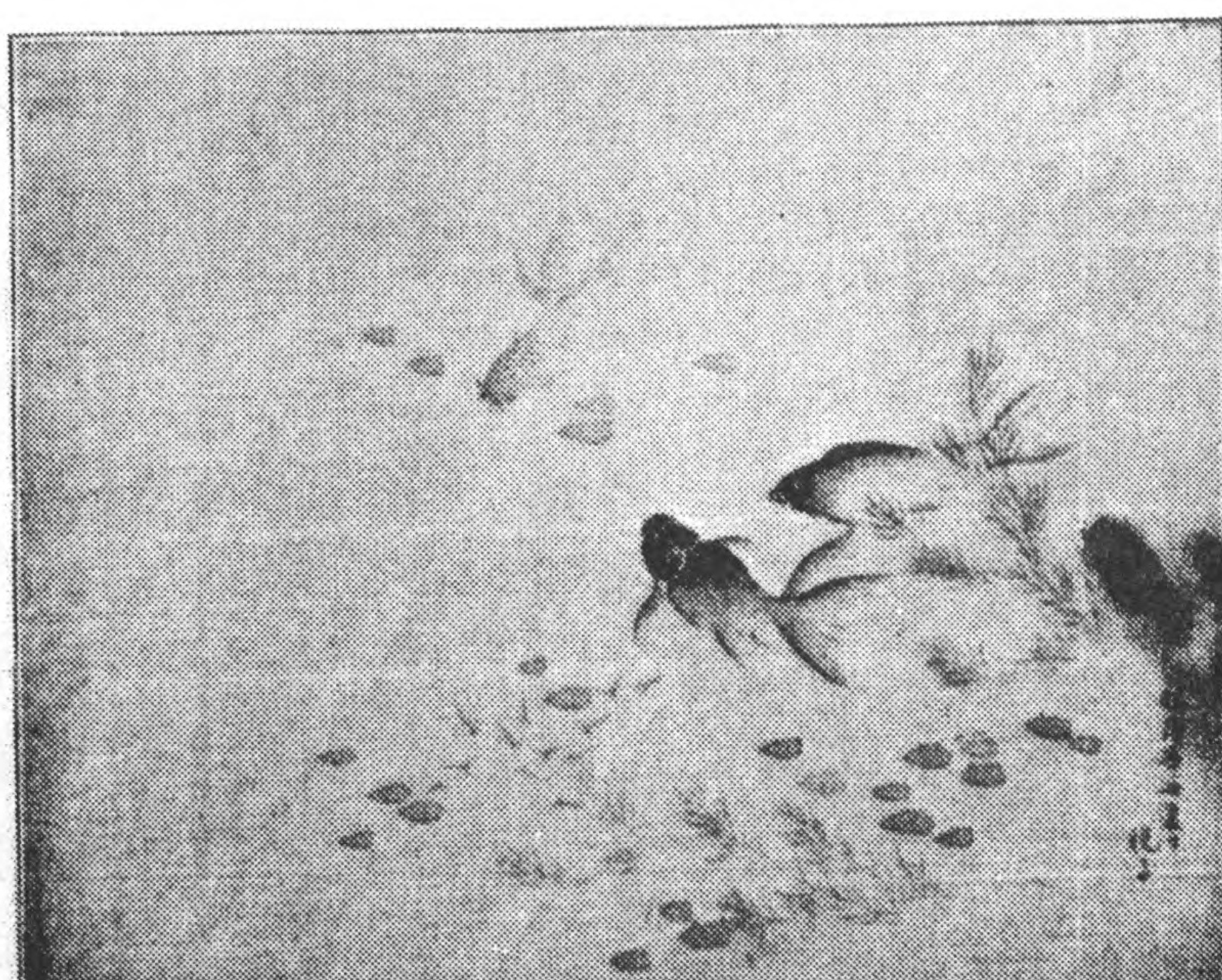
高等官[illegible]等[illegible]

足立寬先生著作

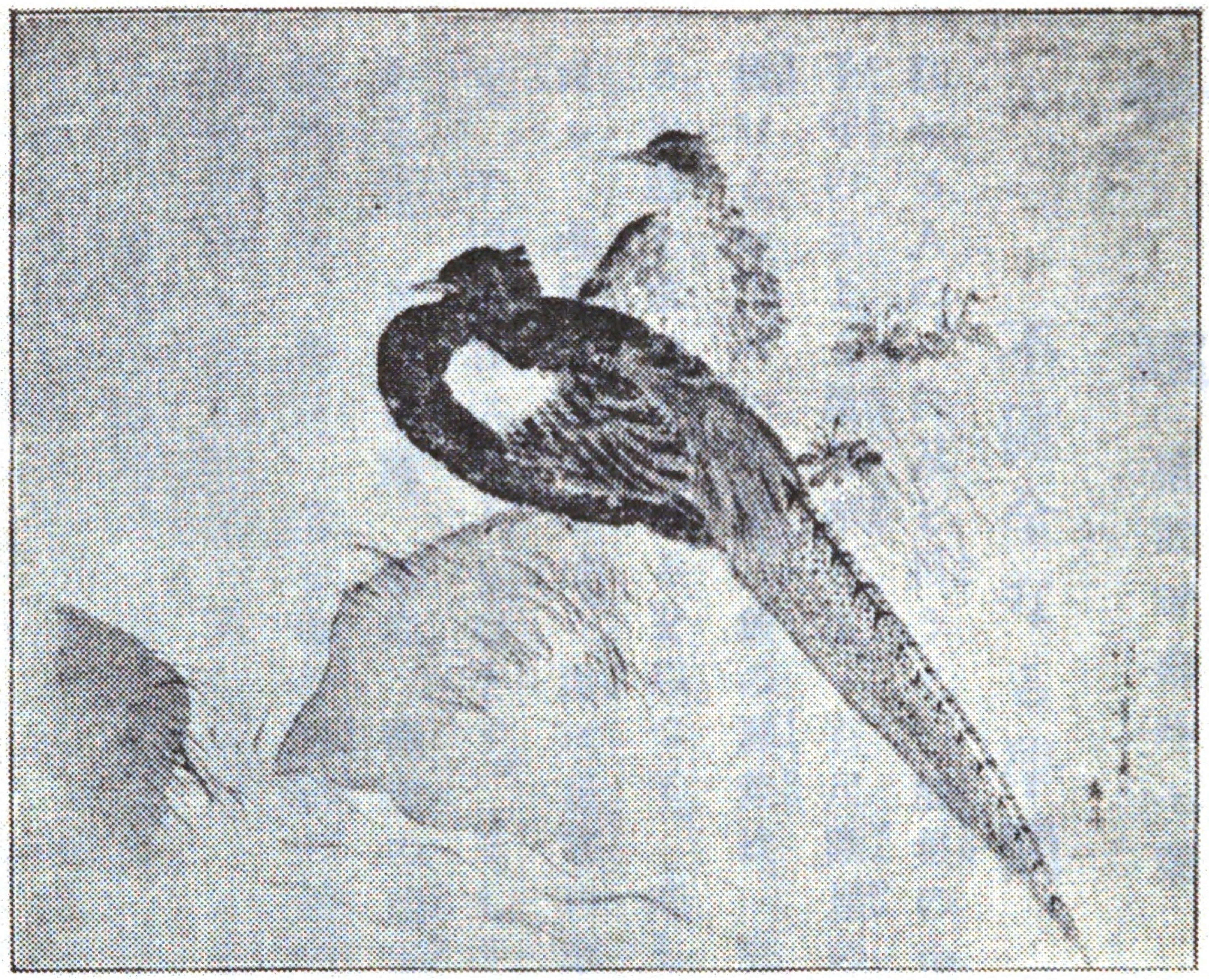
華族女學校卒業生



德川絲子



牧野悦子



橋元房子



野村末子

不健全なる學問

狂せる人の、白刃を揮うて、群集の中に駈來れる危險は、いまだ、稚兒の、乳母子守の手より脱し來りて、百尺斷崖のほとりに嬉遊するに比すれば、猶、危險を極むといふべからず。彼の群集は、狂者の白刃を揮ふを見れば、直に災害を避くるの道を求むるを得るを以つて、必しも、其の災害を受くることなきを得べし。たゞ、稚兒に至りては、遂に災害の來るべきを知ること能はず、嬉々として樂んで、千仭の谷に馳入らむとす。もしそれ、能文達筆の士の是等の實況を描寫するあらば、其の悲酸、到底、諸媛の讀下するに堪へざるところあるべし。

然れども、更に、之を彼の精神の修養をおきて専ら所謂學問にのみ身心を委ぬる者の危險に比すれば、其の災害、いまだ言ふに足らざるなり。狂者の害は一時に止り、稚兒の危險は一身にて終る。是の、其の身を害し、世を賊し、而かも、永く其の害毒を傳ふるものとは、同日に論ずべからず。

昔は、身を修め、家を齊ふるために學に就きたりき。今の人は、眞理を發見せむがために學問すとぞいふ。勿論、眞理にして發見せられむには、修身齊家治國平天下の道、おのづからにあらはるべく、また、終世を學問にさゝげ能ふべき人ならば、所謂眞理を發見するに難からざるべしといへども、普通教育にて學を辭し去る者、或は、他日専ら家庭内助の勞をとるべき人々に對ひて、猶且つ、この高尚なる理想を與へて學に向はしむるが故に、空理空言を弄するものゝみ多くして、實際の學問の効果を收むる者尠し。殊に、女子教育に對して、老者の嫌焉たるもの多き所以は、この弊を認むることを得るがためなり。輕佻浮薄それに伴へる種種の弊害は、不健全なる學問を奨勵せしによれり。

蓋し、學問の要は、德操と學藝とを併得むことを必せざるべからず。若し、己むを得ずむば、學藝をおきても德操を求めざるべからず。德操をすてゝ、たゞ、學藝をのみ習得せむとするは、いたづらに、人をそこなひ世を害し、遂に自己をも失ふべきなり。注意せざるべけむや。



夫婦の道（續）

三輪田　眞佐子

おのれ、久々、艸まくら旅の空にしありければ、囊にものしける夫婦の道に就きても、未だ完結すること能はざりしため、これに代ふるに、旅中偶感を以てせしが、今回は、前々號の結論をものせん。

まことや、夫婦の道は、愛を以て主となし、恒に、誠實を盡し、快苦を共にすべきものなり。思ふに眞正の愛あるものは、我が一身の利害を忘却して全然、夫若しくば婦の福祉を謀るのみ。

古歌に、

わがせこは物なおもひそ事しあらば
　火にも水にも我なげなくに

とあり。實に婦たるものは、かゝる覺悟こそ必要なれ。されど、夫たるものゝ、亦、同樣の覺悟なくば、決して、夫婦たる道を全うすること能はざるべし、然し、なべての家庭を見るに、夫婦和して、安樂を共にするものは多からんも、苦難を共にするものは少し。古人は、糟糠の妻は堂より下ださずと。必ずや、若年の夫婦は、苦難を盡し、否、苦難なき境遇の人に於ても、互に、精勵して人事を營み、其の晩年に及びて、老の安樂を共にするを期せずんばあるべからず。

されど、茲に、新夫婦をして、失望せしむる一大原因あり。其は、所謂理想になん。そも〳〵、新夫婦の未だ結婚せざりし以前に於て、かゝる配偶

を得て、かゝる樂しき家庭を作らんと、實際上企て及ぶべからざる希望を懐き、これを以て、一種の理想となさんも、一朝、嫁するに至りては、其の昔て懐きし理想なるものは、悉く、過去の夢となりはつることは、十が八九の例なるべし。この時に當りて、夫婦たるもの、互に、不平を懐き、以て、不愉快なる家庭を作り、遂に、夫婦たる道を破るに至るものなしとせず。

おもふに、理想なるものは、完全を期するものなれども、實際上、人生の行路は完全なるものにあらじ。月に村雲花に風は、世の姿なるを以て、徒らに完全を願ふは、遂に、厭世的の人となる基なれば、人は、其の程を知らざるべからず。故に、世の配偶者を求むるものに告げまほしきは、其の未だ婚を議せざる以前に於て各、其の理想は比較上接近せんことを期して、互に撰擇するは大に良し。一度嫁せし以上は、一時の事變の起るあるも、決して、心を動すべからず。例之ば、子孫多かれと思ひしも、子なきことあるべし。されど、今日の世には、彼の、子なければ去ると云ふ古人の教は、既に、時勢に適せざるべし。亦、種々の疾病も起るべし。或は、家運も衰ふことあるべし。況んや、容姿のごときは、花の色の一夜の雨に移るが如きは、當然なり。されど、かゝる人生の常道を遁れて、唯、不變不易の人生をなさんとするごときは、全く、空想なるを以て、若し、これを理想とするものあらば、遠からずして、不幸の原因となるべし。

特に、讀者の注意すべきは、空想と理想との區別なり。即ち、空想は、條理存して漸々これを接近し、亦、實現せらるべきものなり　然るに、若し、此の區別を混一せんか。恰も、彼の始皇帝が求め

けん、蓬萊山に於ける不死藥のごとき、空想を以て理想となし、以て、失望して世を終らざるを得ざるべし。是を以て、女子が將來の家庭を作るに於ても、亦、實現し得べき理想に從ふは良しと雖空想のみに耽るは、やがて、悲鳴を察するを免れじ。

要するに、夫婦たるものは、互に節操を守り、あだし心を露だに持たず、專ら、千難萬苦を排しつつ、歩一歩と、人道を進み、和氣靄然たる家庭を作るを以て、唯一の目的とせざるべからず。決して、男女室を同じうするのみを以て、夫婦の道とすべきにあらず。

中産以下女子教育の門戸を開け

（社會改良の根本策）

養德山人

山人、日射病に罹り、遂に、胃加答留に變症したから、根津の紫明館に遊び、百三十疊の坐敷に輾轉しつゝ、左の譫語を呻つて、看護の者に速記せられた故、其まゝ寄贈す。

なー社會の改良は、家庭を振肅せねばならぬ。家庭の振肅は、先づ、家庭の母たり妻たる者に、常識を備へしめ、其の性格を高うせねばならぬ。扨、然うするには、必ず、少女妙齡の時に、小學教育より、引續き、氣の散らぬやうに、何か方法を設けて、克く、教育せねばならぬ。今、世間で、公私の德を養成することや、風俗を改良することに力を盡して、囂ましくいふ人もあるが、皆、其の枝葉の手入れで、根本の改良を圖る者がない。又、

女子敎育も、近年、大に注意して來たが、皆、中產以上の爲にして居るのみで、其の以下の爲に施設する者はない。いはゞ、樓門の上扉を開いて、下の普通に多數の女子が入るべき門のないやうなしかたである。故に、樓車に乘つて來る中以上の女子には通らるゝが、普通の馬車又は徒歩で來る中以下の女子は、入門することが出來ぬで、迷惑である。則ち、完全でない敎育法で、普及ではない。寧ろ、不及である。總て、社會の人類を大別する時は、男女の二分子で、其の女子は、殆ど、半數を占めて居るが、其の又、女子の家資財力を槩譯して見れば、中以上と以下との比例は、凡そ、一と九の割合である。この多數な中以下の女子が、殆と無敎育で、後には、家庭の妻たり母たる者となるに依つて、家庭の振肅も、社會の改良も、出來る筈はない。然るに世間では、その門戶を開けたとて、資力の點から、矢張、入門することが出來ぬ。故に、止むを得ず、放擲して置くのであるといひわけして、枝葉の改良、則ち、社會の公共心を勸むるとか、公德を養成するとか、收賄賭博を責むるとか、醜業を取締るとかの、ことにのみ骨を折つて草臥儲けをして居るが、誠に、勞して功はない。其の方法に依つては、門戶の開けやうによつては、十分に入門させて理想の人間とすることが出來る。一體、生存上、圓滿な社會を保つべき原動力は、敎育に在ること勿論であるが、敎育の成果は、專ら、學校のみに因るものでなく、家庭に竢つことが多いのである。扨、その家庭の主事は誰であるか。則ち、婦人である。男が、外に經營するに對して、女は、內を理むる役である。扨、この社會をなして居る男子の爲には、小學より大學に至る迄、又、各種實業學校に於ける迄、連

絡の門戸を開けてあるによつて、上下貧富の分に應じて、入門出身することが出來る。然るに、女子は、只、小學義務年限を卒へて高等小學に入り、尚進んで、高尚な學校に入らうと思へば、唯一の高等女學校あるのみである。是も、中以上に止まつて、其の以下の門戸ではない。今日の學制では、小學を卒へたばかりでは、女子の能事了れりとはいはれぬ。高等女學校なども、一種の阿轉婆學校に過ぎない。卒業の後、果して何が出來やうか。幸に、高等女學校に入らるゝ丈の資力ある家に生れた女子が、卒業して後、人の妻となり母となつても、修身逆境に沈まねば、まだしもであるが、是とても、まだ、家庭に母となつて子女を教育する任務には乏しい。況して、中以下の之にも入ることの出來ぬ。女子は、何をして境遇を全うするであらうか。大抵、悲しむべき零境に終るばかりである。又、如何して、人の妻となつて内を理め、人の母となつて子女を教育するであらうか。大抵、内を紊し子女を誤り賊ふばかりである。さりとて、是等の女子が、皆、其の境遇を定めず、又、人の妻ともならず、母ともならずに止むことは出來ぬ。故に、山人は、大に哀哭して、方今の教育、殊に女子教育の制度施設は、不具なり、昭代の欠點なりと叫ぶ所以である。

であるから、之を矯正する方法を設けねばならぬ。今日、國民教育刻下の急務として、則ち、矯正の方法として、中産以下の女子實業學校を、地方の所在に設置することを望むのである。しかし、之を設くるにしても、只、通例の學校では、月謝等を出すことが出來ぬ。さりとて、多數の學校を、一時に官設して、官費で養成することは、今日の國情がまだ許さぬ故、そこで、其のやりかたを工

夫せねばならぬ。が、やりかた方法をいふ前に、之が要急の爲事であることを證せねばならぬ。先づ、社會中産以下の女子が、現在の境遇を觀察した所、大槩、義務年限を卒つた後は、只、利益一方を主義として居る、工場の女工となつて、知らず識らず、莫連の群に入るか、子守炊女となつて、衣食の餓鬼で半生を終るか、其の內、破戸漢と野合したり、不義の母となり、破倫の妻となつたり、甚しきは、賤業に陷つて、再び浮ぶことが難い。是等、多數の人裝動物は、如何して高尚の性格あらうか。些のコンモンセンスがあらうか。却つて、害毒を社會に流して、竟には、不靈の子孫を、次代に貽すのみである。眼を轉して、歐米文明の社會を回視した所、間は、似而非文明の怪物もあるが、多くは、常識を備へて、品位性格とも、隨分優れて居る。殊に、家庭の敎育と內營とに當る任務は、確かに、盡しつゝ居る故、われに反して、開明の一要素となり、國運の一原動力として、優遇せられて居る。決して、社會の壞散力と見做されて居ることはない。米國の如きは、他に、一つの原因もあるが、女尊男卑の傾向さへあるのである。これは、渠等の學制がよろしいからのことで、大抵、義務年限が長くて、卒業後は、少し、補修すると、中以下の女子も、自己の生活に窺するやうな者もなく、又、中産以上の者と結婚しても、克く、其の妻たり母たる任に耐へて、其の子女が出來ても、嫁娶するとか、分家するとか迄の管理者となつて、益々、美しい次代の社會を造つて居る。

前來、大略陳べ來つた次第であるから、將來、一日も速く、多數な中産以下の女子の爲に、一門戸を開けて、矯正する方法、則ち、各地方郡市町村に至

るまで、實科學校の特種なもの、例之へば、製絲とか、養蠶とか、裁縫とか、編物とか、何でも、土地の狀況に適した實科と、又、必ず、女子たる常識性格を備へしむることの出來る丈の學科とを授くるやうにして、義務年限の卒つた女子を收容して、普通の莫連的女工たらしめず、阿轆婆的學生たらしめず、卒業の後は、一家の經營を司り、人の子としては順に、人の妻となつては良に、人の母となつては賢に、克く、其の本分を盡させ、進んで、中產以上の資格を得たならば、窈窕たる淑女となり、家庭圓滿の暖爐となつて、全く、社會改良の一原動力となるに相違はない。斯ういふやうにやれば、實は、公立工場であるから、普通の學校とは違うて、或は、終に意外の利益もあり、又、國產實業を殖やすことにもなつて、一擧兩得である。女子教育の手段として、專ら、上流、則ち高等女學校以上女子大學校等を盛んに起して、間接に、下流を化せしめやうとするやりかたもあるが、是れは、國情民度の如何に因ることで、或は危險である。今日の狀態では、是非、先づ普及を主とせねばならぬ。然るに、從來のやりかたは、逆手段で、所謂教育普及の實果としていづくにか在る。甚だ慨かはしい事ではあるまいか。追々、病熱も冷めたに由つて、藝語もなくなり、看護者も速記を止めたさうである故、他日藝語でなく、眞面目に又書かう。





日本女訓（未定章）

川崎重陽

十五、常々、身のたしなみをよくし。髪をみださず、衣服をとゝのへて、行儀を、正しくすべし
およそ、分に過ぎて、華美に装ひ、或は、ことさらめきたる化粧をするなどは、その心のあささも見えすくものなり。わが身のまはりのものは、身分よりも、一きは、ひかへめにするがよろしと心得べし。

十六、心ばへ、行状ともに、よき人を擇びて交はるべし。かりそめにも、誠なき人に近づかば、心つかざる間に、その風にそまりて已も輕薄になり、つひには、大なる禍をも招くに至らん。後悔ゆとも、かひなかるべし

十七、女子は、父母、親族、又は、尊長の引合なくては、男子に見えざるべし。又、みだりに、男子と、書状の往復などすべからず。公の務の上にても、應答授受の際は、男女の別を、正しくするをよろしとす。

孝女はつ

指原乙子

夫れ孝は德の本なり、敎の由て生ずる所なりと、古、聖賢ののたまひし、その御敎を受けし身にも、なほ、この芳ばしき行をなして、譽を後の世に遺

しゝもの、いと稀なるに、身一貧家の少女にして、この尊き行をなし、百世の下、書讀むものをして、感歎措く能はざらしむるものは誰ぞ。

孝女名ははつ、豊後國速見郡杵築の城下上町に生る。父を半六といひて、養子なりしが、はつが、未だいとけなかりし頃、故ありて離別となりぬ。されば、はつは、たゞ、母のかよわき手一つにて、成長しが、家極めて貧しかりしに、年比の憂き苦勞さへそひて、母は、常々病ひがちなりければ、はつが七歳になりぬる頃には、遂に、家をも地をも他人に渡して、路頭にさまよふ身となりはてしを、隣に住める定七といへる者、いとあはれに思ひて、己が納屋を取り繕ひ、此處に母子を住ましめければ、はつは、幼き身ながらも、深くその恩に感じ、是より、日毎に、些少の菓子を賣り歩るきて、活計の代となしければ、見聞く人感ぜぬはなく、孝行菓子とあだ名して、皆、擧りて求めけるにぞ、からくも母を養ひける。

實に、光陰に關守なく、いぶせき中にも十歳を越えにしかば、織り縫ふ業も、いつしか覺えて、人の手助けなどしつゝ、その代をもて、母の醫藥に充て、心を盡して事へしかど、母はやう〳〵衰へゆき、目さへかすむさまなれば、朝夕の食物とても、はつが手をはなつ事なければ、人に雇はれ行きし時にも、食事の節には、必ず、そのよしをつげて、馳せかへりて調へければ、いつしか領主の聞に達し、寶暦三年四月錢を賜ひて賞せられしは、實にはつが十三歳の時なりき。

その後、母の病いよ〳〵重りて、更に食物も進まずなりしかば、はつは、いとゞ胸を痛め、珍らかなるもの、鮮らけきなど、叶はぬ中より、さまざま調へて、心を盡しゝが、或時、母は、魚の鹽辛

に酒をかけしを望みしかば、既に日も暮れはてたれど、更に厭ふ色もなく、直に馳せ出で、此處彼處もとめありきて、母に進めしかば、こよなうよろこびて、少しは食もすゝみしとぞ。かゝる事ども、又領主に聞えしかば、同じ六年八月に再び賞與し賜ひけり。

かゝりし程に、寶曆十一年二月、母は遂に歸らぬ旅に赴きしかば、はつが悲しみはたとふるものなく、泣々野邊の送りを營みしが、領主より賜ひし金の、尙ほ若干かありしを以て、母の墓標を建て猶ほ、祖母の墓標のなき事を愁ひて、これをも營まんと、心を砕くにぞ、近き傍りの人々も、その苦心を見るに忍びず、母御の墓標を建てし上は、おんみの孝心は顯れぬ。祖母様の墓標は、又後に營むとも、障わらじと止めければ、否とよ、母上の墓標を建てし事をば、こよなううれしと思ひ侍れば、祖母様の墓標を建て侍らば、黄泉に在す母上も、さこそうれしと思すらめとて、夏冬の衣をも質代なし、これをも復營みぬ。

かゝる事ども見るにつけ、日頃親しき定七は、是非に、はつを我子の嫁にと思へども、如何せん、そが子なる和助といへるは、その行正しからで、遂には、親をも打ち捨て、行衛も知れずなりはてしかば、せんすべなくて過ごせしに、はつはまた定七を親のごとく事へしにぞ、その年の夏、又々領主より賞を賜はりける。

その後、定七中風に罹りて、立ち居さへまゝならぬを、はつは、かひがひしくとりまかなひ、醫藥はさらなり、活計の道にも心をくばり、いと懇にいたはりしかば、定七はうれしさのあまり、しばしば、臥床より、手を合せてふし拜みしとぞ。定七も遂にあへなくなりしかば、跡の事ども懇に營

みつゝ、祠堂銀をも納めしと、あむ。かゝる事ども、いつしか聞き傳へけむ、和助も、やう／＼古郷へ歸り來りて、いたく先非を悔いしかば、近隣の人々相謀りて、はつを和助に娶せつ、定七の本意を遂げしめしとぞ。夫れ、孝は百行の本にして、衆善のはじめありとは聖人ものたまひき。



家政

衛生上に於ける看護法の一班（承前）

久　我　西　英

（ル）服藥　凡て藥劑は、其の處方に從ひ、時と量とを定めて與ふるを要す。服藥せしむる際は、毎回、瓶を振盪して、之を清潔の盃に注ぎ、患者を扶けて半ば起し、徐々に口中に注ぐべし。但し、重症患者に於ては、身體を動搖することなく、齒列と頰との間に藥液を滴下し、以て、徐々に嚥下せしむべし。丸劑或は錠劑は、一口の水と共に嚥下せしめ、散藥は匙に投じ、少しく水を加へ、攪拌して與ふべし。或は、「ヲブラート」に包み呑ましむべし。藥物を取違へざる樣注意するは、最も緊要のことあり。故に、投藥に先ちて、必ず、瓶札の姓名及び藥袋の姓名を撿査すべし。藥劑の塗擦は、何人と雖も之を爲すに難からず即ち、指端或は拇指球、若くば全手掌を以て塗擦すべき藥液、或は、軟膏を回旋しつゝ壓を平等にし、丁寧に皮膚表面に摺込むべし。

（ヲ）芥子泥及び發泡膏時としては患者に芥子泥或

は發泡膏を貼用すべきことあり。近來、往々芥子泥に代ゆるに、坊間に販賣する芥子紙を以てす。此の使用法は、先づ、温湯にて藥品を塗りたる面を濡ほして、醫士の指定せる皮膚に之を貼り、十分乃至十五分時を經て之を剝取るべし。然るときは、貼附したる痕部に、赤色を呈するを常とす。後、其の部を洗滌すべし。

發泡膏には、西班牙芫青紙を使用すべし。此の紙も其の面を水にて濡はし、患部に貼るものあり。而して、多くは、十二時乃至廿四時間の後、皮膚に水泡を形成するものなれば、夫れまで、之を貼在するを要す。而して、水泡を形成せば、此の紙を除去し、消毒せる針端にて、水泡を破り。軟膏を布片に塗りて、其の部を被ふべし。水泡下の皮膚は、一の創面なれば、注意して總ての不潔物を避くべし。

芥子紙及び發泡膏を貼布する部位は、意を留めて之れを撰定するを要す。常に、床に接する皮膚關節部其の他乳房臍の如き過敏の部は、之を避くべし。又、發泡膏の有効成分芫青と稱する毒物なるが故に、之を取扱ふものは、大に戒愼を要すべきなり。

上巻結び

石井泰次郎

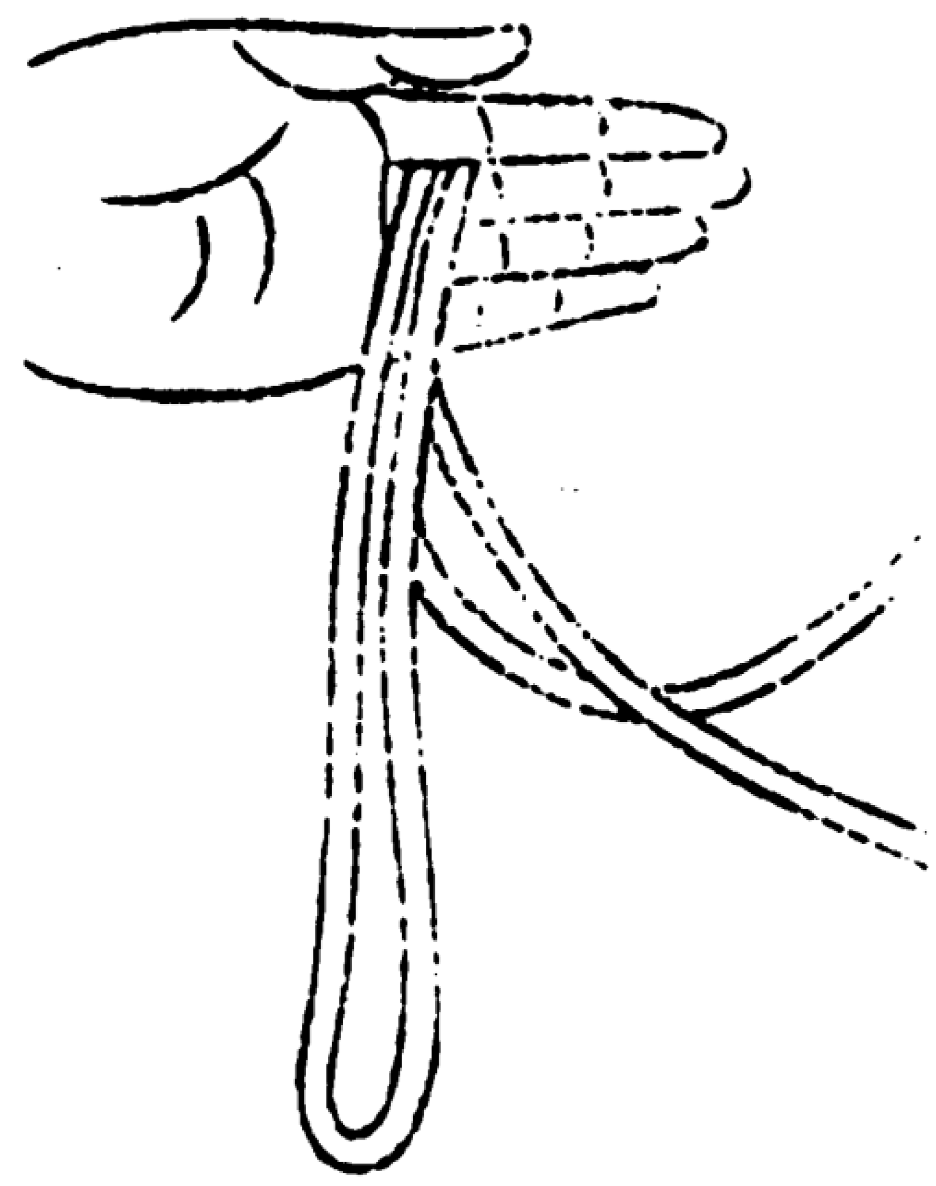
(十)　同一種　東方結といふ

東方結結形秘傳書とて結かたを記せり。今、改めて其の樣を記さん。

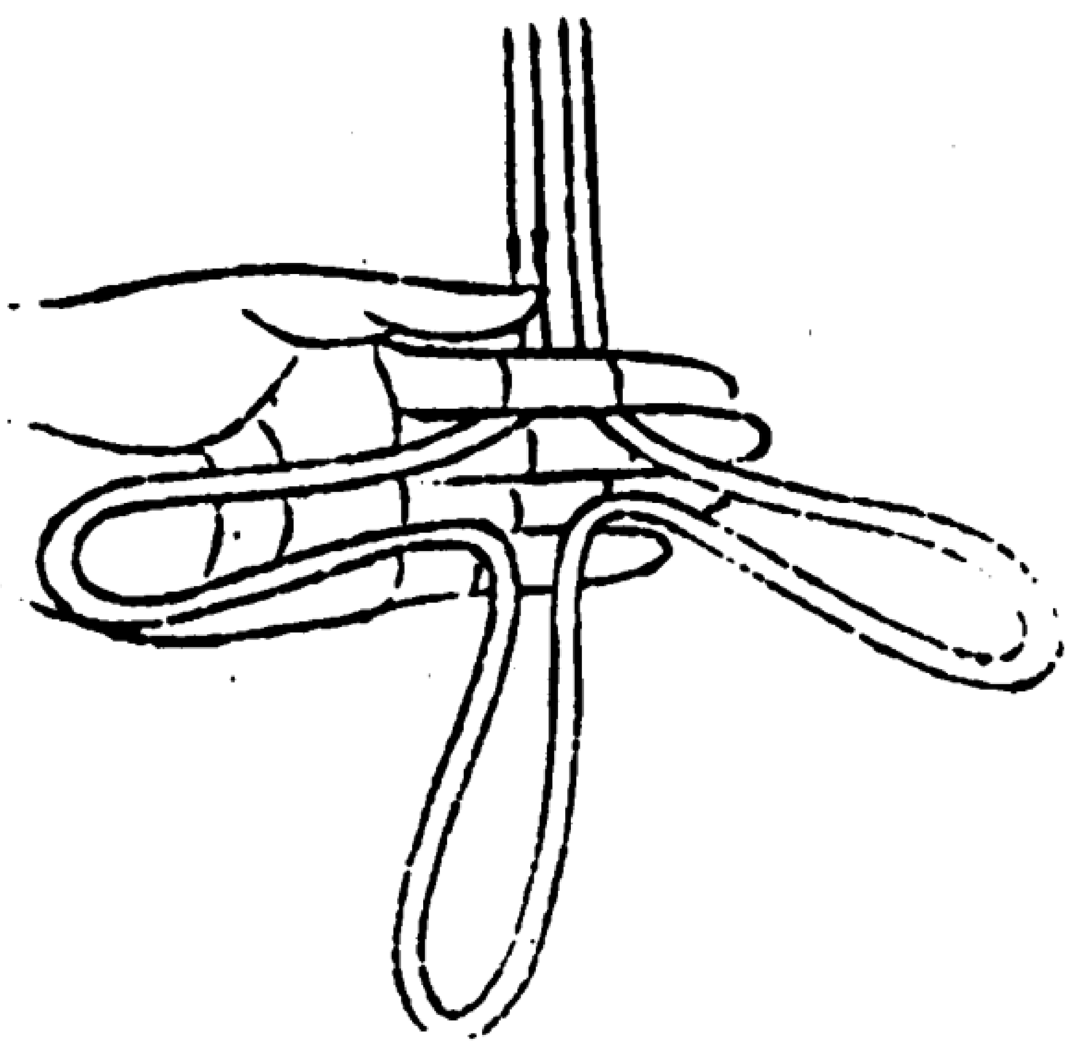
結樣は、まづ、紐の中を輪にして、手前の方へとなし、左の二三の指の間へ通して、紐先を向の方へのばし、手の平にて、輪形を三ッ分にわ

けて、左右と手前の方へおしおき、第一に向の紐先を、手前の紐の左の方へと折返し、次に、左の輪を右の方へと右の輪の手前の方に折返

第一圖

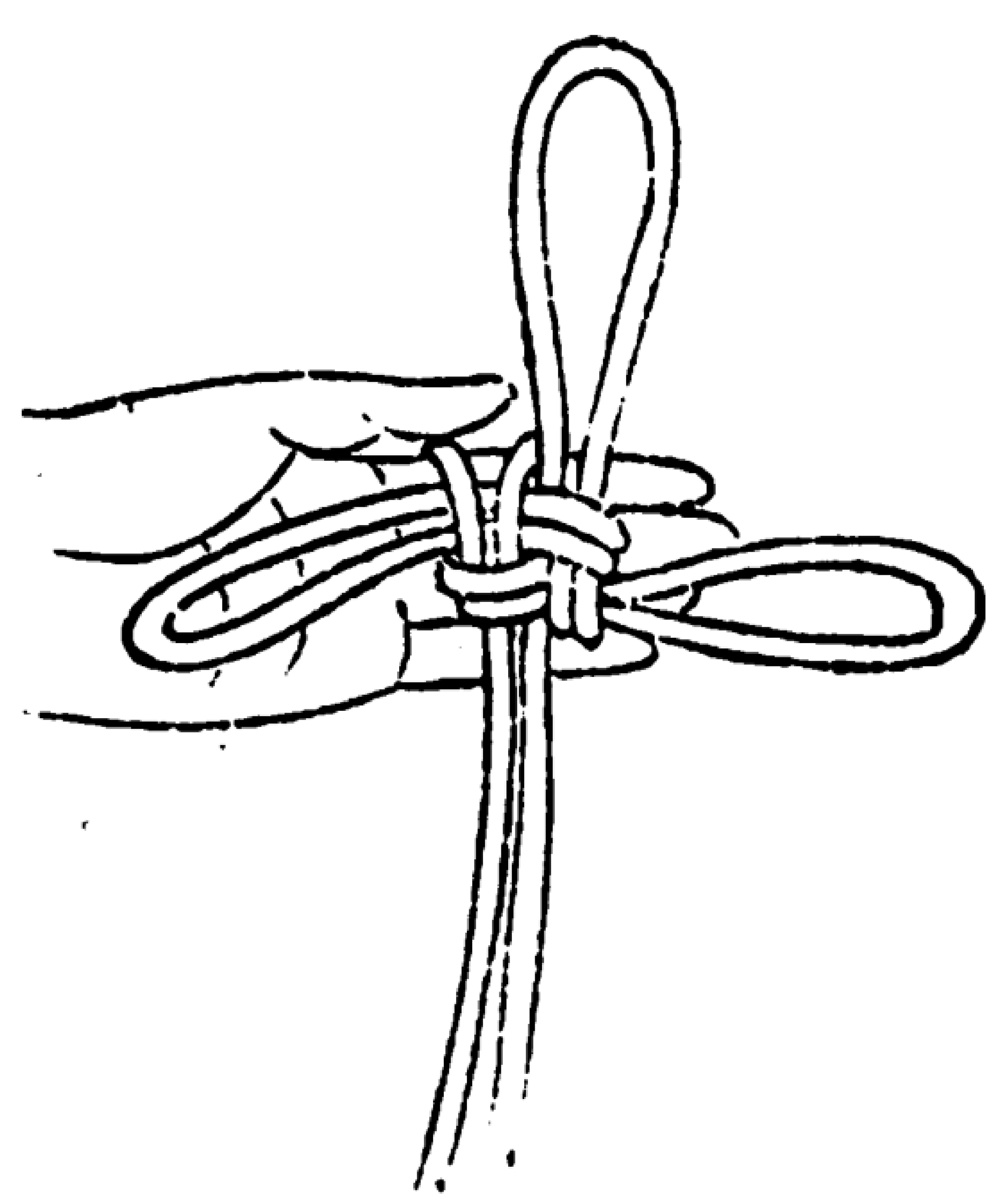


第二圖

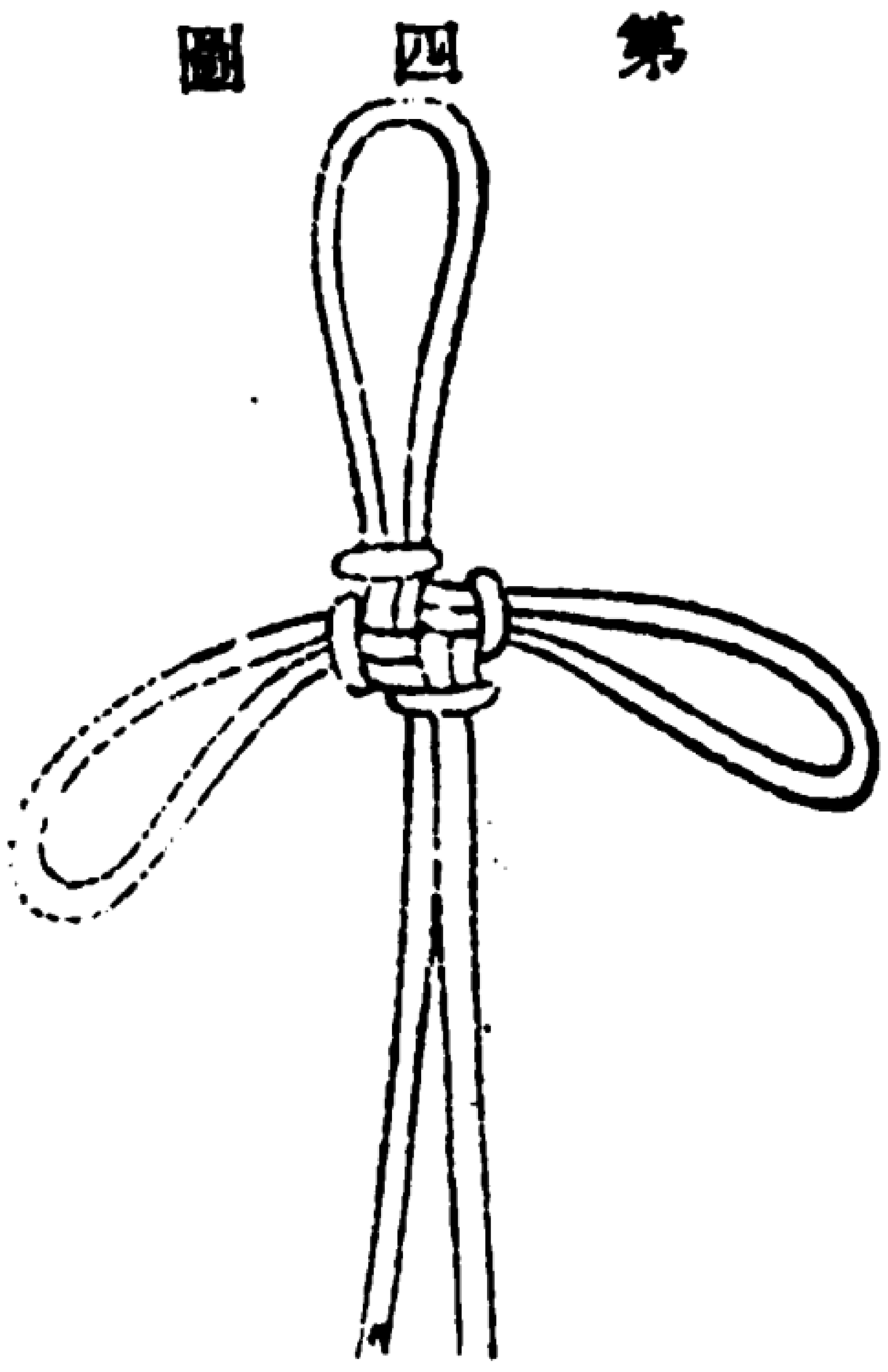


し、次に、手前の輪を向の方へ折返し、次に、

第三圖



第四圖



右の輪を左の方なる紐先の元の間へと通して、指をぬきて引しむべし。

（十二）蚫結

是を、あはぢむすび、あふひ結などいふは非なり。古書には、皆、あはび結とあり。坩坏の臺（みくしあげくせ直しの調度にて白水を入る）御厨子棚の打敷　結記

だいどころ

軽便コロッケ

先つ、牛肉を、こまかにきり、能くたゝき、玉ねぎ、人參をきざみ、牛肉の中にいれ、能くたゝき、まぜ、胡椒食鹽を加へ、能程の形にまるめ、メリケン粉の上にころがし、鷄卵をときたる中にいれ、パン粉をまぶし、牛の脂肪、又は胡麻油にて、茶褐色になる迄、あげるなり。

牛肉と野菜のやはらか煮

牛肉を賽の目にきり、玉葱、大根、人參杯、好みの形にきり、水をひた〱にいれ、水へらば、少しづゝさして、二時間程も煮、やはらかになりたる時、馬鈴薯蕈類を加へ、胡椒食鹽を、能程に和し、文火にて、皆やはらかになる迄、煮込たる後、メリケン粉、少しを、水にてとかし、汁の中へ投れ、どろ〱になりたるを、器に盛り、汁を、添へて出すべし。

つぶし蕪青

蕪青の大きなるを撰み、鹽ゆでになし、やはらかになりたる時、あげて水氣を去り、裏漉にて漉し、鍋にて、牛酪を溶かし、鹽胡椒を加へ、これに、つぶしたかぶをいれ、能く、かきまはし、煮て、附合せに用ゐるべし但、余りながく煮るべからず。

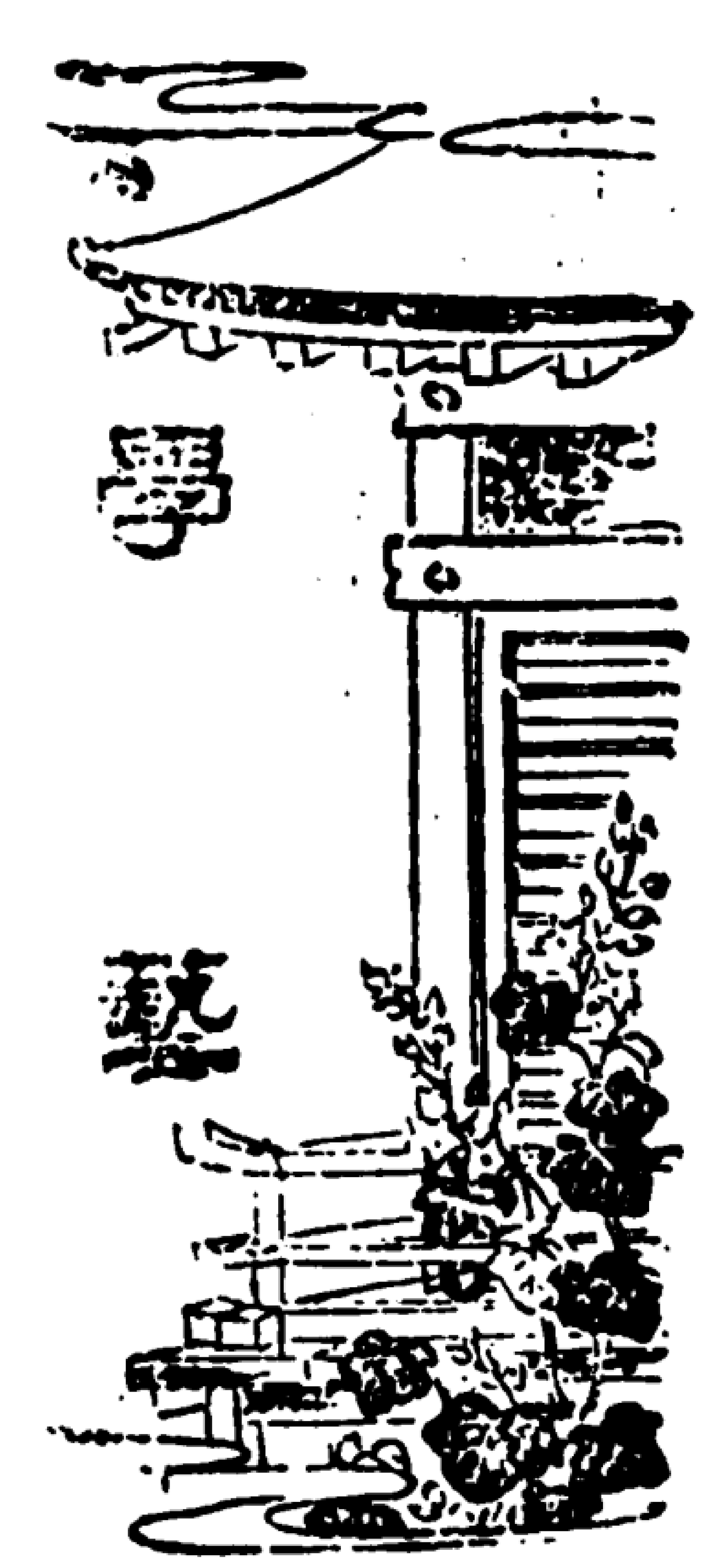
牡丹菜牛酪煮

牡丹菜を、能く洗ひ、一枚〳〵にはがし湯煮し、てほかにきり、水氣を去り、牛酪を溶かしたる鍋に胡椒食鹽をふり、前に、湯で置たる牡丹菜をいれて、かきまはし、いりわけて後、鷄卵をときたるをかけ、うへしたと、能くかきませて、皿に盛るべし。

白瓜の印籠漬

白瓜の、首尾をきり、しんをくりぬき、蓼しそ、生蕃唐がらしなどいれ、鹽加減して、壓をつよくして、一日を、經て、食すべし。





國文學講義

紫式部日記講義(二十一)

井上頼文

また、この、うしろのきはにたてたる、きちやうの　に、内侍のかみの、中務のめのと、姫君の、少納言のめのと、いとひめ君の、こしきぶのめのとなど、おしいりきて、みちやう、ふたつがうしろの、ほそみちを、え人もとほらず、行きちがひ、みじろぐ人々は、そのかほなども、見わかれず。との丶君達、宰相中將かねたか、四位の少將まさ通などをば、さらにもいはず、左宰相中將

經房宮の大夫など、れいは、けどほき人々さへ、御几帳のかみより、ともすれば、のぞきつゝ、はれたるめどもを見ゆるも、よろづ、はぢわすれたり。
いたゞきには、うちまきの、雪のやうになりかゝり、おししばみたるきぬの、いかに見ぐるしかりけんと、のちにぞ、をかしさ。

釋義

○きちやうのとに　白几帳の外にあり

○内侍のかみ　尙侍にて、内侍司の長官なり。定員二人ありて、常侍、奏請（奏して、其報を請ることを云ふ）宣傳、女孺を撿校し、内外命婦の朝參と、禁內の禮式（後宮の禮式を云ふ）の事とに供奉することを掌る職あり
さて、この尙侍は、中宮の御妹にて、妍子と申す御方あり。三條天皇の皇后に立せ給ひ、後、枇杷皇太后宮と申す。
今、中宮の御妹ぎみたちの次第を示さんため、重修榮花物語系圖を節錄す。

○道長

- 女子　一條院后　上東門院彰子　至太皇大后　出家　延久五年十月三日崩　八十七
  母同賴通（一條左大臣雅信公ノ女倫子ナリ）（土御門ト號ス）
- 女子　三條院后　皇太后妍子　萬壽四年九月四日（又十四日トモ）崩
  母同上
- 女子　後一條后　中宮威子　長元九年九月六日崩
  母同上
- 女子　後朱雀女御　尙侍嬉子　萬壽二年八月五日薨
  母同上

─女子　小一條女御　萬壽二年七月九日薨
母同頼宗（醍醐天皇ノ皇子、西宮左臣高明公ノ女ナリ）
─女子　師房公室　寛徳三年薨　八十
母同

○中務のめのと　中務は、乳母のよび名。

○姫君　これも、中宮の御妹なる、威子を申す。後一條天皇の中宮に立せ給ふ。藤壺の中宮と申す。

○いとひめ君　これも同じく、中宮の御妹にて、嬉子と申す。朱雀天皇の女御にまゐり給ふ、登花殿の女御と申す。

○いとひめぎみ、の、いと、は、最愛の意にて、倫子の御腹なる、一番末の姫君なれば、特に寵愛し給へるよりの稱なり。榮花物語、初花の巻には、この君を、弟姫君とも申せり。

○宰相の中將かねたか　宰相は參議のことなり、即ち參議にて、近衞中將を兼ねたる稱、かねたかは、兼隆にて、粟田の關白藤原道兼公の二男なり

○四位の少將まさ通　四位にて、近衞少將を兼ねたる稱、まさ通は、雅通にて、左大臣雅信公の孫、父は、辨の少將時通なり。後、祖父雅信公の養子となり、寛弘元年十月逝す

○左宰相中將經房　上にいへり

○れいは　平常はなどの意

○けどほき　氣遠きの義にて、近しからぬこと

○いだゝき　人々の頭の頂なり

○うちまき　散米のことなり、米を、まけば、物怪も恐れて寄りつかぬものとて、御產の時のみに限らず打ちまくなり。されば、御產の時のみに限らず

何時にても、悪鬼を拂はんとする時は、打ち散
らすなり。その根原は

日向の國の風土記に

臼杵郡の内、知鋪郷は、天津彦火瓊々杵尊、
天磐座を離れ、天八重雲を排き、稜威之道別而、
日向之高千穗二上之峰に天降す時に、天暗冥く
晝夜不別、人物道に失ひ、物色別難し。玆に、
土蜘蛛有り、名を大鉗小鉗と曰ふ。二人、皇孫
に奏言しけらく、尊の御手を以て、稲千穗を
拔き、籾と爲て、四方に投散したまはゞ、必ず
得開晴とまをす、于時、大鉗等が、所奏如、千穗
稲を搓て、籾と爲て投散したまへば、即ち天開
晴りて、日月照光りき。因高千穗二上峰と曰
ふ、後人改めて知鋪と號ふ。（本書漢文なるを、
かきくだし文に改めて引けり。また、此の文は、
贈正四位平田翁の、釋日本紀と、仙覺が萬葉の註
に引けるとを合せ見て、誤りを訂して、古史徴
に引きたまへるを摘録す。）

と、ある、これなり。
散米もて物怪をしりぞけたる事は、諸書に見え
たるが、今昔物語の一條をあげて、諸孃の一覽
に供へん。

幼兒爲護枕上蒔米付血語第三十

今昔、或ル人、方違ヘニ下京邊也ケル所ニ行タ
リケルニ、幼キ兒ヲ具シタリケルニ、其ノ家ニ本ヨリ靈有ケルヲ不
知テ、皆寢ニケリ、其ノ兒ノ枕上ニ火ヲ近ク燃シテ
傍ニ人、二三人許寢タリケリ、乳母、目ヲ悟シテ兒ニ
乳ヲ含メテ寢タル樣ニテ見ケレバ、夜半許ニ塗籠ノ
戸ヲ細目ニ開テ其ヨリ長五寸許ナル男、五位共
ノ日ノ裝束シタルガ馬ニ乘テ十人許、次キテ枕上ヨ
リ渡ケルヲ、此ノ乳母怖シト思ヒ乍ラ打蒔ノ米ヲ多
ク掴テ打投タリケレバ、此ノ渡ル者共、散ト散テ

失ニケ其ノ後、彌ヨ怖シク思ケル程ニ夜曉ニケレバ其ノ枕上ヲ見ケレバ其ノ投タル打蒔ノ米毎ニ血ナム付タリケル日來、其ノ家ニ有ラム思ケレド此ノ事ヲ恐テ返リニケ然レバ幼キ兒共ノ邊ニハ必ズ打蒔ヲ可置キ事也トゾ此レヲ聞ク人、皆云ケル亦、乳母ノ心ノ賢クテ打蒔タルバシ也トゾ人、乳母ヲ讃ケル　（下略）

とあり。（こは丹鶴叢書に收むる所の本と、一本とを校合せてかゝげたるなり）

○おしぼみたる衣萎れて、しわになりたる衣

譯解

また、この御産屋の後の際に立てたる白き几帳の外に、尙侍(妍子)の御乳母なる中務といふ乳母、姫君(威子)の御乳母なる少納言といふ乳母、いと姫君(嬉子)の御乳母なる小式部といふ乳母など、いづれも、このところに押し入り來て、御几帳を二つ立てゝある、その後の細道を、人も通り得ざる程に居ならびたるゆえ、此の間を身をひねりつつ行きちがふ人々は混雜して、その顏なども、誰れが、たれと見わけられず。

殿(道長公)の御子息達、參議の中將兼隆、四位の少將雅通などの、平常御ちかしき人々をば更に、とりたてゝ申すに及ばざれど、參議左中將經房、中宮の大夫齊信など、平常は伺候せぬ人々さへ、御几帳の上より、動ともすればのぞきつゝ、泣き腫したる目もとなどを、諸人に見らるゝもいとはず、つねならば見苦しき泣き顏を見らるゝことは、耻かしきゆえに、おしかくすことなるに、今日は心配のあまりに、萬事耻などは忘れはてゝ居たり。

また、あまたの陰陽師等が、惡魔を祓らはんとて、

つかみては、うちまき、つかみては、うちまく散米が、まるで雪のやうに降りかゝりたるありさまや、または、人ごみに、もまれ、もまれて、べとべとに、萎れて、しわだらけになりたる衣を着たる姿などは、どのやうに見苦しくありしならん、と、御安産のありし後に思ひいだせば、實に可笑しかりき。

漢文學講義

佐々木天游

傷兒敬

鹽谷簣山

嗚呼。汝何爲而生哉。汝之在母。未辨男女。試卜之男也。及生。呱々振屋壁。不問而知其爲男兒也。日肥月慧。嫣然媚笑。能應和人。人亦頗弄愛汝也。我家貧。夫妻相對。終日寂然。無歡笑之聲。及汝之生。稍譁矣。而一旦捐父母。將何以慰情。汝軀幹肥大。眉目淸朗。未嘗有微恙。意期其成立。汝以何疾而殤哉。天殤若是。則不如不生之愈。惟憾汝未知父母耳。然使汝知父母。則父母之戀汝。必將不止乎此矣。均之死也。丐其後一日而死。母寧先一日而死歟。嗚呼。雖汝未知父母。而父母終身忘汝也哉。

嗚呼。汝何の爲にして生せしや。汝の母にある、未だ、男女を辨せず、試に、之を卜すれば男なり。生るゝに及んで、呱々屋壁に振ふ。問はずして、其の男兒たるを知るなり。日肥月慧、嫣然として媚笑し、能く人に應和す。人も亦頗る汝を弄愛す。我が家貧し。夫妻相對し、終日寂然として、歡笑の聲なし。汝が生るゝに及んで、稍、譁すし。而して、一旦父母を捐つ。將何を以てか、

情を慰めん。汝、軀幹肥大にして、眉目清朗、未だ嘗て微恙あらず。意に其の成立を期す。汝、何の疾を以て、而して殤せしや。夭殤する是のごとくなれば、則、生れざるの愈れるにしかず。惟、汝、未だ父母を知ざるを憾むのみ。然ども、汝をして父母を知しめば、則、父母の汝を戀ふること、必ず、將に此に止らざらんとす。均しく之死あり。其の一日を後うして、而して死せんよりは、母寧ろ、一日を先にして、而死せん歟。嗚呼、汝、未だ、父母を知ずと雖も、而も、父母終身汝を忘れんや。

兒敬を傷む。傷は、弔文の一種にして、賓山先生の兒、名は敬と云ふ人が、未だ人とならずして、早死されましたものでありますから、其の死亡の速かなるを悲しみ、哀傷して、作られましたもので、即、哀傷文であります。

借、嗚呼汝何爲而生哉で、あゝホントウに、汝そこもと敬は、何の爲に、此の世中に生れて來たものぞよや。生れてまだ月日も立ぬのに、死んでしまうたが何の爲に、此の世中に生れてきたのであろうか。生る爲に生れてきたのであるか、死ぬる爲に生れてきたのであるか。生れた計りで、死んでしもうたが、何の爲に、此の世中に生れてきたのであろうか。誠に、哀しく、傷はしきことぞよ(嗚呼は、あゝと聲を長く引きて、歎息するの辭あり。何は、怪み問ふの辭あり。)汝そこもとの、未だ生れずして、母の胎内にあるや。男子であるか女子であるかを辨じわきまへ、別つことが出來あかつた。ソコデ、男の兒であらうか、女の兒であろうかと、試みに、卜筮をして、占うてみた所が、男の兒ぢやと云ふ占あひであつたが、果して其の占ひの通りで誕生をした時に、呱々をぎや〳〵と

(呱々は、をぎやく\と泣く聲あり。)泣き立る聲が、女の子とは違うて、大きく勇しくして、家の内の壁に響き振うて、大きな産聲を立て丶泣たッコデ、女であるか、男であるかと問ひ尋ねてみずしても、其の男の兒であると云ふことを知たのぢやが、日が立つに連れて、一日一日と肥立て大きくなり、月が立つに連れて、一月一月と知慧が付てきて、段々と、日月に連れて、太り知慧付て、人をみては、嫣然にこ〱と、媚び笑うて、可愛らしき姿になりて、能く、人に慇和しなづみて、人の顔をみては、にこ〱と笑ふ様になりた。ッコデ、人も亦尙餘程そこもとを弄愛し、手に抱き上げ弄びて可愛がつて居た。來る人毎に、可愛ゆい兒ぢやと抱き上げて、ムゾウガリテ居た。(茲所の也字は、決語にあらず。語勢の助字なり。)一體、我、自分の家は、貧乏をして、貧しき暮しを致して居りまして、安樂をすると云ふことが御座りませんで、夫婦、相對座して日を終るまで、寂然と物淋しく暮して、一日中、樂むで歡び笑ふの聲がなく、誠に、ひつそりとしていたが、汝、そこもとが、出生したに及なりて、稍々譁すしくなりて、少しく家の内が賑かになりて來て、歡び笑ふの聲も、時々には聞ゆる様になりたぞよ。(矣字は、截然と緊殺めて結ぶ時に、用ゐる助字で、カウアリタゾヨなど丶云ふ意に同じ。)ッコデ、大變に汝の生れてきたのを悦んでをりた。サウシタ所が、一朝に父母を捐て死んで逝てしまうた。汝獨りが、樂み慰むの柄であつたのに、一朝に父母を捐て、死んでしまうたのものだから、將又、何事を以て、自分の心情を慰め悅ばしめてユカウニ汝を外にしては、樂みの種になるものは、一事としてなきものを、死んでしまうたものであるから、最早、自分

の心情を慰めてくれるものは、何一事もなく、折角歡び笑うて、暮したものを、復、寂然として淋しく暮さねばならぬが、ナントシク、哀しいことであらうか汝こそもとは、躬の丈や、(軀は躬に同じ。幹は、骨幹なり。)骨格も、中々に肥え太りて並の子供よりも大きく丈夫にして、眉や目の樣も、清らかに朗らかにして、みるからに、可愛ゆき立派な子供でありて、未だ甞て、微少の病氣にでも罹りたことがなくして、中々、壯健な生れ付であつた。(恙は、本つゝがと云ふ蟲名でありますが、昔時、此の蟲の毒に罹りて、病を患ふるものが多かつたと云ふ所より、轉じて、病氣と云ふことに恙の字か用ゐたものであります。)ものでありますから、自分の心の中には、其のそこもとが、成り育ち、生ひ立ちて、成長してゆくであらうと云ふことを、期しあてゝして、キット、壯建に生育に相違ないと、心に期て、喜んで居たのに、一朝忽ち、父母を捐てゝ死んでしもうたが、汝そこもとは、何の病氣をわづらうて、サウシテ早死をしたのであらうか。(字書に、未レ成レ人喪曰レ殤とあり。子供の時に、夭死することなり。)平生達者で、一度でも、煩うたことさへもなきのに、一朝に忽ち、死んでしまうたが、何の病氣を以て夭死したのであらうか。もしも、夭殤すること若是で、こんなに生れて年月も立ぬで、夭死をするものならば、則、其の時は、一層のこと、世中に生れて來ぬ方が益しで、結句生れてこざる方が、勝りて居ると云ふものぞ。ソレニツテモ、父母の見境もまだ付ぬ嬰兒の時に死んでしまうて、汝そこもとが、未だ、父と母とを知らんで、死んでシマツタと云ふことのみばかりが、遺憾で。其の事計りが殘念じや。然しながら復思ひ直して考へてみると、ド

ウシタで死ぬものであつたならば、一層のこと、父母を知らぬ前に死んでしまうたのが益しで、もしも、汝そこもとをして、（然字は、轉語にして、ケレドモと、上文を轉ずるの氣味なり。）段々と生育して、知慧付て、父母を知る樣になりて、阿爺さんとか、阿母さんとか、見識りて謂ふ樣になりた、後に死んだならば、則、其の時は父母の汝そこもとを戀ひ慕うて、哀しみなげくことは、必ずきつと、今日の此の哀しみ位の事ではなくて、ヤメヤメ、一層深くなげき哀むことであらうぞよ。サウシタミルトキニハ、今日、死んでもらつたのが、まだ哀しみが少いから、一層の事、思ひ明めよいと云ふものぢや。均しく、同じく一樣に、之死ぬのぢやが、同じ死ぬることならば、其の一日を後れて、一日でも、長く世中に生きて、段々と知慧付て、父母を見識る樣になりて、死ナリヨウよりも、毋寧、一層のことに、一二字にて、むしろと訓むべし。與字は、よりはと訓むべし。）一日を先にして、一日でも、早く小して、まだ物のあやめも何にも分らぬ間に、死んでもらうた方が、思ひ明め易うして、同じく死ぬるものならば、一層のことに、早う死んでもらつた方が、ましであらうか。一日でも長く生きてサウシテ死んでもらへば、其丈、深く悲しみ慟かねばならぬから、早かつた方が、まだ益しだらうよ。嗚呼、ホントウニ、汝そこもとは、未だ、父母を見知らずして死んでしまつたとは申せども、しかしながらも、汝の父や母やは、よし汝が、汝の父や母やを知ぬにもせよ。終身一生涯の間、汝そこもとのことを忘れてしまはうや。中々に、忘れやうとしても忘れらるるものではないぞよや。忘汝也哉と、深く嗟嘆の

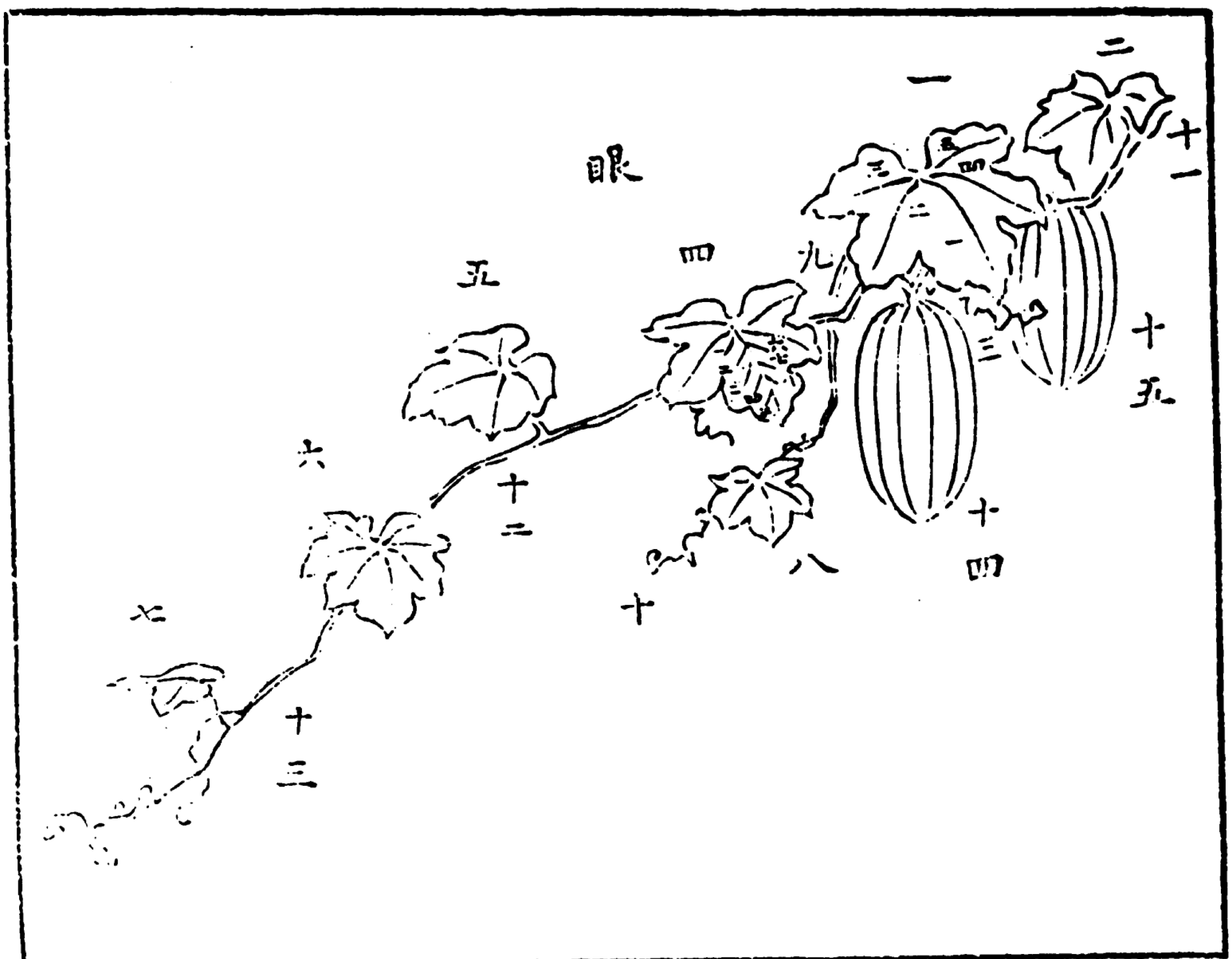
辭を以て、此の文を結びましたものでありますが全篇皆、父母が兒を憐れみ哀むの眞情が溢れ滿ちて居りまして、一讀するからに、惻傷の意に堪へられませぬ。此が、眞に情至るの文であります。

和畫通信講義（第十六回）

山崎彩峨

墨にて畫くには、淡墨を含めし筆先へ、濃き墨を附して、葉を畫き、蔓を畫き、瓜を畫き、後ち、濃き墨にて、葉脈を入るゝなり。

顔料にて畫くには、寫生する時季によりて一樣ならず。されど、通常は、藍がちなる深靑色へ、墨少しばかりを和して、葉を畫くなり。尤も枯色ならば其の部分は、赭墨



を使用すべし。瓜色は、極めて未熟のものは、黄かちの青色にて畫き、次は少しく、代赭を和して畫き、次は、代赭を和したる青色を含めし筆先へ朱を附して畫く。稍熟せる者は雌黄を含めし筆先へ、朱を附して畫き、漸々成熟の度に從ひて、多く紅色を使用するなり。その最も熟せるものは、朱中に黄色を含有せしむるのみにて、筆端に黄色のあらはれざるをよしとなす。瓜線は、乾きて後ち、未熟なるときは深緑色、成熟するときは朱にて入るべし。尤も時としては、熟せるものにも、青色の線を施し、或は、最初に黄色のみにて畫き置き、乾きて後ち朱にて塗りつゝ線の部分を殘すもよし。蔕は黄がちの青色にて畫き、葉脈は、藍か藍墨かにて入るゝなり。

家計簿記法講義

磯部武者五郎

三、被服費　（衣服類、夜具類、諸反物、小切れ類、洋服附屬品シャツ、クツ下の類、ケットの類、糸綿の類、・手拭、足袋襟巻帯の類、雨着の類、裁縫料、其他すべて被服に關する費用等）

四、教育費　（入學金、授業料、書籍、圖書新聞雜誌代金の類、子弟寄宿料、すべて教育及智識開發に關する費用）

五、租稅　（地租、家屋稅、營業稅、所得稅、以上の附加稅、市區町村費、車稅等）

六、使用料　（各種上納の使用料（電話、水道等）、借地料、借家料等）

七、修繕費　（大工、植木屋、其他人足の雇料、諸道具の修繕費、建具造作の修繕費、等）

八、交際費　（親類、朋友、知人の交際に關する費、贈り物、吊祭、見舞、祝儀に關する費用、諸饗應に關する費用等）

九、小遣費　（父母、兄弟、姊妹、妻子、自分の小遣）

十、諸給與　（下女、僕、男女雇賃、車夫馬丁の給料、其他諸手當金）

十一、車馬費　（馬の飼料、馬車、及人力車の使用に關す

る費用等)

十二、衛生費 (醫藥に關する費用、平常衛生に關する費用、醫師へ報酬と藥料等)

十三、通信費 (郵便、電信、其他交通に關する費用)

十四、雜費 (以上の諸科目に入らざる小口の費用を此の科目の中へ入るゝ)

十五、臨時費 (以上の科目に入らざるものにて、臨時に生じたる特別の費用を此の科目の中へ入るゝ)

以上收入、支出の科目は、皆、經常費と申しまして、一家經濟上通常の經費を申すのであります。この外に、財產上の記入を爲すが必要でありますから、次に、財產上の科目を列記します。この財產の科目は、收入支拂何れへも設け置きまして、其の賣却買入を記入するのです。

財產に關する科目

一、土地 (宅地、田畑、山林等)

二、屋家

三、證券類 (公債證書、勸業債券、銀行會社の株券類、保險、證書類約束手形振出手形爲替手形等恩給與金に關する證書類)

四、預金 (銀行預金、貯蓄預金、積金の類、)

五、貸金 (貸附金、立換金の類、)

六、現金 (現在の金額、)

七、負債 (借入金)

金を借入れたのと、返辨したのとは、財產上に非常に影響を及ぼしますから、財產調を致しますとき、若し負債の有るときは、之を調べ置きますが必要です。(以下次出)



月明かなる夜友きたり　東久世通禧

思はえす夜をふかしけりすむ月に
　こゝろうかれて語りあひつゝ

寝覺に虫を聞く　佐々木高行

老か身のねさめはわひし近くなく

むしのこゑさへ遠くきこえつ

雨中虫　高崎正風

むら雨は晴れやしぬらん鳴やみし
庭のむしの音またきこゆなり

殘月　鍋島直大

朝日かけ匂へるそらを出てみれは
しらみて殘るありあけのつき

山初秋　津輕承昭

桐の葉をさそひし風のみにしみて
やましたかけも秋みえにけり

竹間月　宮地嚴夫

我窓のひとむらたけのひまもりて
さしくる月のかけのさやけき

竹上月　北郷久政

すみのほる月のかつらに影さして
尾上のすゝきたれまねくらん

秋草咲き亂れたり　小出粲

八千草のはなをふましと辿るまに
みうしなひけり野への小道は

朝秋風　坂正臣

有明のつきよりおろすあさかせに
のきのかつらの露そこほるゝ

夜虫　植松有經

此のころは夜なかくなりて鳴虫の
聲にねさめぬあかつきもなし

老翁　三輪義方

ふるおきな子の子の世までなからへて
親のおやとぞかしづかれける

名所月　下田春興

大ひえやをひえの峯にきりはれて
月おしてれりしかのさゝなみ

水上月　蜂須賀隨子

汲み得たる影はひさごにわりなから
つゝ井の月はなほのこりけり

臥見月　近衞貞子

さす月はものに隠れてふけたれど
影ばかりみんねやのうちにて

曉露　鍋島榮子

いり方の月かげすみておくつゆの
ひかりもすごしあかつきの空

秋夜讀書　南郷柳子

ともし火の影はそむけて窓にさす
月にふみよむあきのこのころ

海邊擣衣　前田朗子

わたの原浪しづかなるゆふまぐれ
海人がきぬたの音きこゆる

終夜見月　岩崎寧子

秋の夜の月見のゆかにおもふどち
かたふく迄のかけをみしかな

湖上月　保科節子

はるゝゝときり晴そめて秋のよの
月かけにはふにほのうみづら

河邊月　中村禮子

うちなひく尾花のほかのかけもなし
野川のきしのあきのよのつき

雨後月　三宅龍子

雨雲はあしはやくしてつきかげを
またもおふかとみゆる空かな

夕月照松　服部礒子

秋かせに夕きりはれてやまのはの
まつのなみ木に月てりわたる

心の花

野亭秋來　井上頼文

住なれし野邊の庵に夕風の
音身にしみて秋は來にけり　木橋岩雄

世をすてゝ身はかくれ野の草のやに
またおとつるゝ秋の聲かな　朝日忠彦

朝の露夜の虫にも知られけり
野中の家も秋や來ぬらむ　須田源

閑庭露

とふ人も絶えて深けき庭の面に
置く白露そさやけかりける　朝日忠彦

隠れ住むわれともしらでこの庭に
玉なす露や人を待つらむ　鈴木孝義

おとつるゝ人もあら野の我が庭は
露さへ己かまゝにおくらし　高根信麿

世の塵をへたてし庭の小草にも
露はよな／＼おとづれにけり　須田源

ゆくりなくあづまのみさとにまうのほ
り侍りけるをり　大森信恵

むつまじく親子姉妹まとゐして
かたらふ今日を何にたぐへん

おもはえず海山こえてたらちねの
母のやまひをとひてけるかな

夏けしき

凉窓讀書　小西甚之助

北窓の竹の葉風にふみよめは

こゝろもさへこそすゞしかりけれ

山上納涼

あへぎつゝのぼる山路の松陰に
そよと吹くる風の涼しさ

曉涼

虫はらふ千まきのふみに風たちて
しら浪たかき窓のすゞしさ

門涼

見覺の星の數こそまさりけれ
くるゝ夜ことに門すゞみして

氷店

夕露の結ぶあし垣月さして
よそめすゞしくこほりうるあり

入りませとよばふ少女の聲さえて
氷よりまづすゞしかりけり

夏風

艸しげき夏野をゆけばふく風に
うすき袂のみだれがちなる

夏曉

夏の夜はあかねながらもとくいねて
あかつき起をするぞたのしき

東雲の空に起きいでゝ夏草の
露分けくれば月ぞかたふく

納涼

海邊川邊いつれはあれど涼しさは
こゝろの水のすむにしかめや

はしゐしてうたせる庭のやり水に
夕露むすふ木々のすゝしさ

夏夕

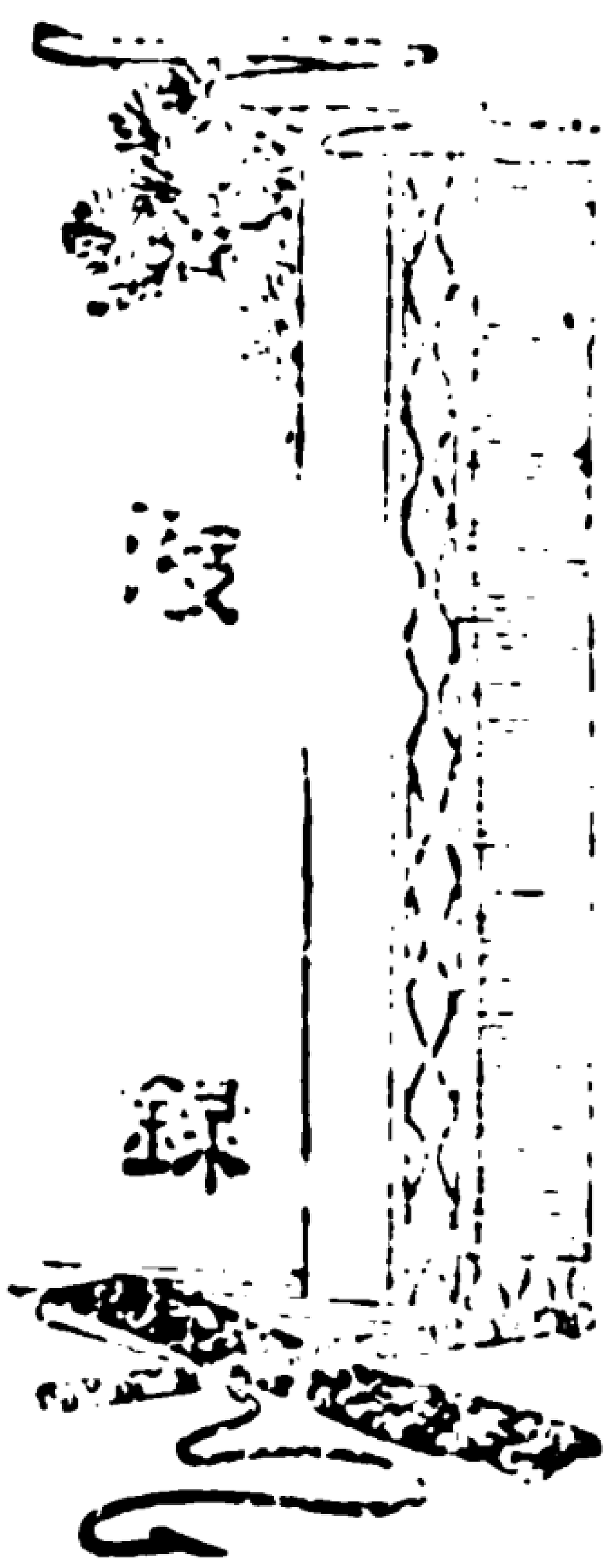
照りつゝく夏のゆふへは空遠く
雲の水尾だに見るぞすゝしき

清水

月なから結ふ手涼し山かけの
　岩間のしみづそこも見えつゝ

泉

立ちよりていさ結ひてん松柏
　しげみかもとの山の井の水



座右銘

山方泰

●白河樂翁公の自敎鑑

夫れ天地に陰陽あれば、人に夫婦あり、夫婦あれば、父子あり、父子あれば、兄弟あり、兄弟あれば君子あり、君子あれば、朋友あり、これ自然の道なり。

一凡そ父母は慈と敎とを主とし、子は愛と敬とを主とす。

一人の子たるものは、能く父母に事ふるのみにあらず、又我身を愼みて、父母の憂を遺す事なきを第一とす、古に曰く、父母はたゞその疾をうれふと、然れば別て疾をつゝしむべし。

一父母います時は遠遊せずといへり、是亦父母の憂をおそれてなり、況や一朝の怒りに、其の身をわすれて、其の親に及ぼす事やあるべき。

一子を育つる道は、禮義正しく、嚴かなるべし、かりそめにも愛に溺れて、ゆるかせになすべからず。

一子を敎ふるには、幼より善に導き、惡に馴れしむべからず、然れば朋を擇ぶべし、水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友によるといふ事、格言

ありと知るべし。
一寵愛の子たりといふとも、兄をさし置き、弟に家を傳ふべからず、是によりて國家を亂し丶事こそ、其のためし歴然たれ。
一人の臣たるものは、只其の君有る事を知りて、身ある事を知らず、國あることを知りて家ある事を知らず、臣たるの職、此の、外あるべからず。
一君の臣をつかふ事、禮を以てすべし、君の一言に依て、臣義を至す事あり、然らざる事あり、凡て君德あれば、臣是に從ふ事、草の風に靡くが如し。
一人に君たるものは、先、其德を明にして、民を治むべし。民をおさむるは、慈悲の心を第一とす。
一君の心正しければ、善人近づき、たゞしからざれば、佞人近づく、佞人近づけば君を迷はず、

陸奥小湊



一凡臣を仕ふには、其の臣の安くして、勞する事なからん事を欲すべし。
一夫は唱へ、婦は從ふべし。これ陰陽の道なり、およそ妻をめとるは子孫の爲なり。賢德を本とす。容色に迷ふ心あるべからず、また其の人の分限によりて、妻なからんに、是亦賢を擇ぶべし。容色をもて寵愛すべからず。
一兄には恭敬をいたし、弟には慈愛を致すべし、共に父母の遺體なれば、相互に親みて疎にすべからず。
かはし、事を賴みあふ者あれば、
一朋友は物をいひ第一貞信にして、相欺かざるを本意とす。
一人は益友を近づけ、損友を遠ざくべし、己に諂ふ人は、われに害有りと知るべし。

一凡そ人に交はるには、敬を主とす、たとへ、酒宴をなし、歡を盡すとも、禮容正しく、敬の心を忘るべからず。

一口舌は禍の門なり。口より出で、我身をうしなふ。

一巳が不機嫌にまかせ、人を疎にし、無禮なるべからず。また、巳に才ありとも、是を以て人にほこるべからず。

一凡そ、天下の人の中に、貧賤ありとていやしむべからず、富貴も貧賤も、皆、天のなせるなり。死生命あり、富貴天に至り、命なくば、富貴もうけまじ。

一不德にして富貴なれば驕を生ず。必ず其の富貴を保ちがたし。

一凡そ、人は慈悲心厚く、人を憐むを第一とす。又、つとめて眞實なるべし。内の誠なく、外の飾を専にする者は、必、久しからずして變ず。譬へば、紅葉の華やかなるは、忽ちに色の變ずるがごとし。

一人として萬事に思慮なきは惡し。されど、私意あるべからず。みな學問によるべし。

右は自らいましめ、また、己と同じき童蒙にも告げんとて、明和七のとし、睦月の武城の側にしるしぬ。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、貴て我が短を補ふべし、他の短は、以て反省の料とすべし

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせるの愚をなすべからず

第四章　獨逸婦人

（其の六）　獨逸婦人の模範

（一）ビスマルク夫人

權略縱横、鐵と血を以て日耳曼帝國を築き立てしビスマルク翁は、恬、冷酷嚴猛の一大政治家なるが如くなるも、其の半面には、和氣春風の如く温厚油の濃なるに似たるあり。之れ即ち翁の天品なるべしと雖も、其の夫人の徳性が、翁の半面に波動を與へしは、蓋し尠少ならざるべし。

夫人は、ポメラニア州のプットカムメル氏の女にして、極めて、温和なる家庭に生れ、嚴粛なる禮儀作法の下に長じぬ。而して、當時、俾翁の年少氣鋭なる、學校にあれば校規を無視して、鬪爭を好み、家にあれば逸遊之れ事とし、到る處に狂ビスマルクの名あり。然れども、この狂ビスマルク、なかなか賢美の佳人を愛すと知る。即ち、一旦、ブットカムメル氏の佳人を見るや、愛着の念惻する能はず、直に其の家に到ッて、刺を通じ、遠慮もなく客室に上り、威儀も禮法もあらばこそ、跏平と坐して、主人に對ッて結婚を申込みぬ。

プットカムメル氏夫妻は、この粗慢なる人に、掌中の珠とし愛育せる孃を與ふるは、情に於て忍びず。容易に之を肯せず、而も、孃の慧眼なる、忽ち、この狂ビスルマルクこそ他年邦家の棟梁たるべき偉丈夫たるを看破し、却て、父母に請うて、之に嫁げり。左れば、狂少年の歡は、譬ふるに物なく、直に相携へて、新婚旅行の途に上れり。而も、途次、維廉一世にヴェニスに於て謁見し、大に内外の形勢より治國の策を献じ、他日、雄飛の餘地を造れり。

斯くて、歳華矢の如く、昨日の狂少年は、漸く堂堂の歩武を進め、下院議員より、外交政務官となり、一躍して孛國首相の位置に陞り、又、外務大臣となり、大に維廉陛下の信任と、闔國の望を得たり。

ビスマルク夫人は、元來政治的婦人として、適當の資質を供へしも、孛國の風習として、婦人の政治に干與するを許さず。且つ、俾翁は、曾てフレデリツキ皇太后の政治に與りしを、太く厭視せしかば、夫人は、唯、其の家庭を以て帝國とし、其の家政を以て國政とし、更に、其の二男一女を愛育し、良人に事ふるを務とし、又樂とせり。俾翁が、丁抹征伐に、對澳戰爭に、或は、佛國の蹂躙に、伯林會議に、幾たびか頭腦を惱め、鐵腕を鳴らし、叱咤奮勵沈思默考の餘、偶、其の家に歸れば、樹は榛莽として庭隅に榮え、花は紅に宿露を染め、西里の寒煙東山の月、錯然として坐中に聚れるの攸、淸楚雪の如く、溫和玉の如きの夫人の、之を迎ふとや、流石に、豪宕不羈の英雄も、忽にして、稚兒の如く、莞爾として喜び、暢然として樂み、亦、孛國柱石の任の、己にあるを知らざるに似たり。夫れ、一代の英雄、俾翁をして此の如くならしめし夫人の、德性と能力とは、豈亦絕命のものなくして可ならむや。左れば、具翁をして常に云はしめき。妻と共にせずんば、半日の散策をも我はなすを欲せずと。其の曾て萬馬騑交ふ戰地にあるも、夫人の事は、須臾も念頭を去る能はず。屢々手翰を寄せ、其の信を見る、以て無上の快事とせり。俾翁の行動は、未だ悉く世範とするに足らざるも、夫人が築ける俾氏の家庭は、長く日耳曼人の好模範として渴仰する所なりと云ふ。



奥州三之月近傍の樵

（二）　ルイザ皇后

今を去ること百年の以前には、ルイザ皇后は、歐州に於て第一の美人にして、而も、品位高く、愛國の赤心燃ゆるが如きを以て稱せられ給ひき。常

時、拿破翁一世の勢は旭日の如く眇たる孛魯士亞國は、常に、其の鼻息を窺はざる可からざるの窮境に立ちたりき。而して、皇后は、毫も之を畏れず。却て、其の良人たる孛國王を勵まし、王が觀望の念を絶たしめたり。

既にして墺露同盟軍が、佛の爲に大敗するや、皇后は、二子を膝下に勵まして曰はく、爾等、自今佛國に復讎して、今日の怨を必ず雪ぐべしと。誰か知らむ、他年佛國を蹂躙して城下の盟をなさしめしは、當日の稚兒、他日の維廉第一世なることを。

ナポレオン、既に同盟軍を破り、孛都に入り、狼籍至らざるなく、皇后をして幾たびか血の如き涙を揮はしむ。然れ共、國民は擧つて皇后に服し、皇后に請うて、媾和談判に臨ましむ。皇后は、當時、毫も禮儀を紊さず、極めて鄭重に搆へ、流石の拿破翁をして、崇敬の念を生せしめたりき。

他日、拿破翁は、人に語つて曰く、美人には再び逢ふとあらむ。品位高き皇后をも亦見ることあらむ。而も、余は、此の如く稱揚すべき女后に逢へるは、空前絶後なりと。吁之ある哉。

皇后の令德嘉行を一々摘擧せば、限りもなきことながら、此に筆を留めぬ。唯、彼の地に遊ばむものは、伯林の市街を注視せよ。如何なる陋巷の壁間にも、皇后の畫像は嚴として揭げられ、其の前に叩頭し、其の德を稱ふものゝ甚だ多きことを。

女子要書解題（於之部）

三浦千畝

朧夜月　一巻

此書は野中婉女の著なり。婉女は野中兼山の六女にして、寛文元年土佐國高知に生る。兼山國

政に與り、頻に改革を行ひ、峻嚴貸す所なかりしかば、これが爲に罪を得て、擧家幡多郡宿毛村に謫せられ、尋て病歿す。元祿十六年、婉女赦に遇ひ、朝倉村多寶院に歸住し、醫を業として老母を養ふ。人嫁を勸むれども從はず。生涯獨居し、常に書を讀み、詩歌を賦し、頗る古賢女の風ありしといふ。享保十年六十六にして歿す。

此書は、衣斐某の女、太田某のもとに嫁する時書きておくれるものなり。卷末歌あり、『五月やみあやめも分かぬ道筋をたづねてあゆめおほろ夜の月。』書名は此の歌によれるなり。

興津氏之女書付　一　卷

奥書に『元文庚申（五年）冬十二月、稲葉迂齋筆を武江城東の僑居に執る』とあり。迂齋名は正義江戸の人なり。佐藤直方に師事す。學成るに及び、直方の薦により、肥前唐津侯の儒官となる晩年、山崎派の學を推奉する者、皆迂齋を仰慕し、諸侯にして弟子の禮を執るもの、亦多かりしといふ寶暦十年十一月十日江戸に歿す。年七十七。

此書を、作れる由は、文の首に見えたり。『こゝに、興津氏の女、元文かのへ申のとし、奥田何がしのもとに嫁しゆきぬ。いにしへははなむけに言をおくる禮あれど、われら德もなく、筆に力もなければ、しばらくもだしぬ。しかはあれど、また心におもふことを、いはではつるもまたはいなければ、いさゝか心に思ひ出る事を、筆にまかせて書付侍る』

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

曾我兄弟

狩衣すそ野の露と消えたれと
　その名はともにふしの高山

三句、いといやしげなり。消えしかどとは、など いはさりけむ。四句も、結句も、初學の口つきにて論ふにたらず。

大礒虎

ひとめをもおもはでさしゝ盞に
　ふかきこゝろはくみしられつゝ

初句、二句、ともにいやしといはむもさらなり、盞にふかき心なと、をさなし。結句、つゝも叶はず。

佐々木高綱

おくれしの心の駒や立はなの
　小島か崎にたちかはりけむ

高綱が、うち川を渡りたるにはあらずして、心の駒か、梶原におくれす、小島か崎にゆきたるに聞ゆなり。結句、たちかはりけむとある、此の詞もふつゝかなり。

鴨長明

みちぬれはかへるならひの世を捨てゝ
　半の月やもてあそひけむ

詩歌管弦に妙なりとはしられたれど、琵琶を彈きたる、其の證故ありや。いかに。半の月は虚言なるべし。

巴女

身ひとつはをしまさらまし粟津野の
　はらに小松のたねなかりせば

四句、はらに小松とは、つたなき極なり。かく

いひては、巴、小松の種をはらめるにきこえてあやしむべし。

大和めくり（承前）

井上頼文

奈良皇城の遺址

頼文曰く、平城の皇城は、文武天皇の母后、元明天皇の和銅二年、はじめて、那羅の都を建てたまふ。同二年に遷都ありて七代の天皇（元明、元正　聖武　孝謙　淳仁　稱徳　光仁）の皇居の地なり。その時の、左京は、今の、南都、右京は今の、西京なり。

皇居の遺址は、興福寺の西、超昇寺郷二條村の南、街道の巽、字築地の内といふ地ありといへり。

保安百首に、源仲正

菫さくならの都の跡とては石すゑのみそ形見なりける

昔時、竹外翁は、御陵墓の衰頽して、佛寺のみ盛なるをなげきて

半空湧出兩浮圖　更有伽藍俯九衢
十二帝陵低不見　黒風白雨滿南都

春日の飛火野

和銅五年正月、河内國、高安の烽火をやめて、此の野におかれしこと、續日本紀に見ゆ。

古今集に、讀人しらず、

春日野のとふひの野守いでゝ見よ今いくかありて若葉摘みてん

新古今集に、前参議教長、

若葉つむ袖とそ見ゆる春日野の飛火の野べの雪の村ぎえ

猿澤池　天竺の獼猴池をうつしたるより、此の名ありといへど、例の俗家の造言あるべし。

拾遺集。　、猿澤の池に、うねめの身なげたるを見て、　　　　　人丸

わぎもこが寢みたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき

大和物語に、むかし、ならの御門につかうまつる采女ありけり。かほ、かたち、いみじう、きよらにて(中畧)御門を、かぎりなく、めでたきものになん思ひたてまつりける。御門めしてより、さて後、又もめさゞりければ、限りなく心うしと思ひけり。夜晝心にかゝりて覺え給ひつゝ戀しくわびしくおぼえ給ひけり(中畧)世にふまじき心地しければ、よる、みそかに出で猿澤池に身をなげてけり。かく、なげつとも、御門は、えしろしめさゞりけるを事のついでありて、人の、そうしければ、聞しめしてけり。いといたうあはれがり給ひて、池のほとりに、おほんみゆきし給ひて、人々に、歌よませ給ふ。

柿本人丸、

わぎもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき

と、よめる時に、御門、

猿澤の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし

と、よみ給ひけり。さて、この池に墓せさせ給ひてなん、かへらせおはしましけるとなん、と記せり。

こはふるき小説にて、そのかみもてはやされた

圖奥淺虫の奇巖



るものなるべし。人丸の歌など、奈良朝のしらべにあらざることあきらかなり。さるを此の物語を實事のやうにおもひとりてよみいでたる歌多かり。釆女祠のかたはらなる衣掛柳を、

夫木集、承明門院宰相
猿澤の池のやなぎやわぎも子がねくたれ髪のかたみなるらん

同集、勝明法師、
猿澤の池のうすらひ打とけて、玉藻をやとす岸の青柳

高圓山、
三笠山の南にならびてそびえたり。尾上宮の址ものこれりとか、續日本紀に、元明天皇、和銅元年九月、春日の離宮に入らせたまふこと見ゆ。この離宮は、恐らくは尾の上へ宮のことならんか

鎌倉右大臣、
ゆふくれは衣手涼し高圓の尾上宮の秋の初風

續拾遺集に從二位行家、
高圓の尾上の雪は跡たえてふりにし宮は人も通はず

八重櫻　沙石集に、東圓堂のまへにありと見ゆれど今は枯れてなし。詞花集に、一條院の御時ならのみやこの八重櫻を人のたてまつりけるを、御前に侍りければ、其花をたまはりて、歌よめとおほせらるれば、よめる伊勢大輔、
いにしへのならの都の八重櫻けふ九重ににほひぬるかな

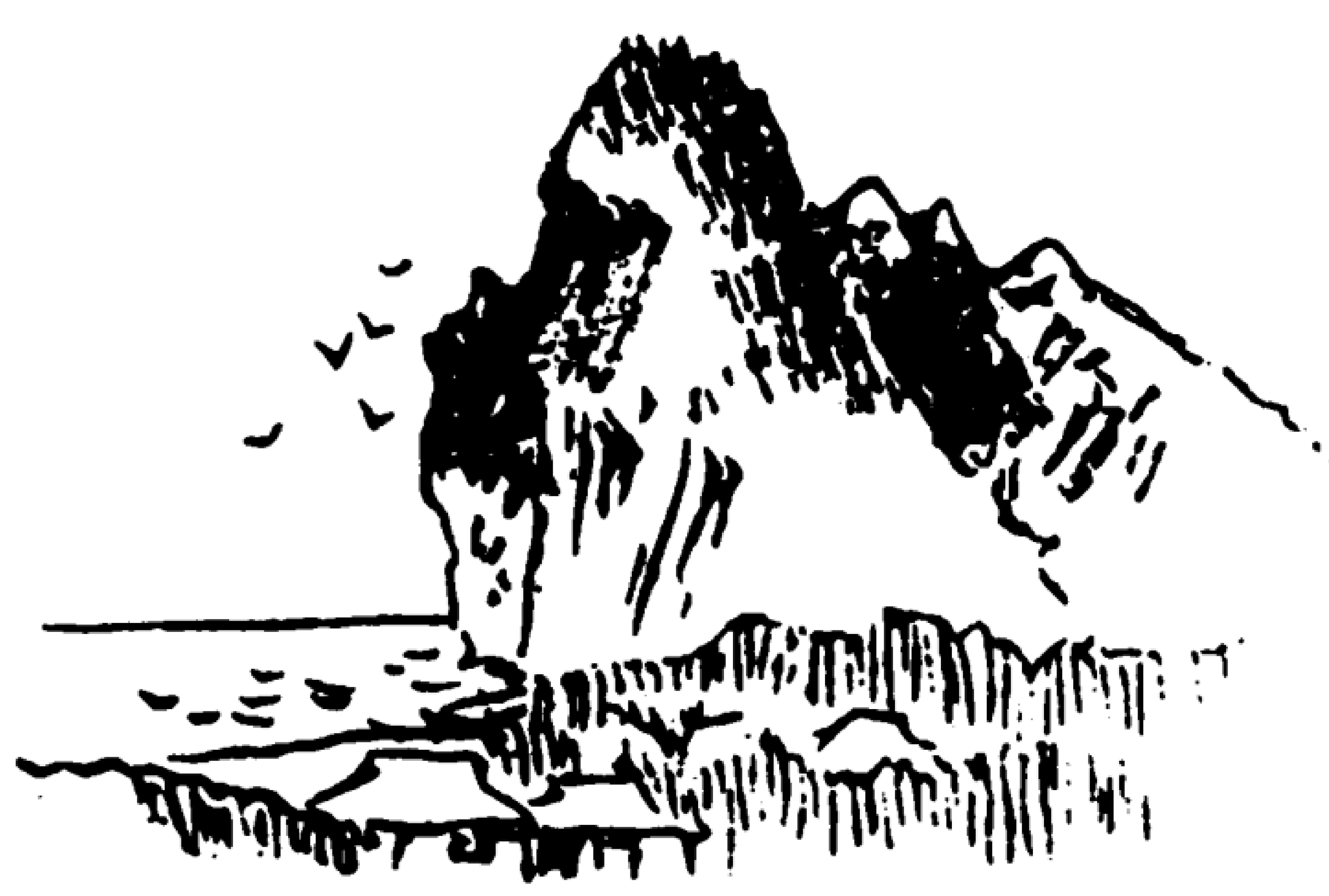
新古今集に、建久六年、東大寺供養に、行幸の時、興福寺の八重櫻さかりなりけるを見て、枝にむすび侍る。よみ人しらず
古郷と思ひなはてそ花櫻かゝる御行にあふ世な

りけり
沙石集に、上東門院とて、后おはしましける、八重ざくらを、都にめされしかば、大衆、いとびんあし。たとへ、いのちは、ともあれ、櫻をはりて、えこそまいらすましと、いあひて、あおがちあるわざなどもありとかや。女院、かくときこしめしたまひて、奈良法師は、まこゝろなきものとこそ思ひしが、ことに色ふかしとて、櫻はめさずありけるあと見ゆ。

鐘樓　洪鐘は天平四年はじめて鑄たる古物あり

高さ　一丈三尺六寸　　口の徑　九尺一寸三分
厚さ　八寸　　用熟銅　五萬三千六百八十斤
白銅　二千三百斤

北海道幌別の海岸



と、朝野群載に見ゆ

大佛殿　天平年中創立の結構は如何に高壮ありけん。朝野群載は其の概略を談りて云く。

殿の高さ十五丈六尺
東西　二十九丈
南北　十七丈
基砌の高さ　七尺
東西　三十二尺七尺
南北　二十丈六尺
內陣の柱　九十六本
天井　三千百二十蓋
廻廊の柱五百八十本
東西　八十五間
南北　百間

舍盧那佛座像　現今五丈三尺五寸　續日本紀には五丈として、元亨釋書には、一十六丈と記せり

鑄具用銅錫は、朝野群載に

熟銅	七千三萬九千五百六十斤
白錫	一萬二千六百三十八斤
錬金	一萬四百三十六兩
銅	五萬八千六百二十兩
炭	一萬六千三百五十六石

座像の長に差違あるは、再度の兵燹に罹りて補鑄せる故なるべし。高倉天皇の御宇治承四年十二月二十八日、平重衡卿の放火にかゝり、伽藍灰燼となり、頭、鎔けながれて落ちたりし事平家物語に見ゆ。その後、再建なくてすぎたりしを後、白河法皇右大將賴朝公、および、醍醐の俊乘坊重源上人に勅して再興あり建久六年三月十二日大佛供養、賴朝公、參詣して、八木（米の離合文字なり）一萬石、黃金一萬兩、上絹一千疋寄進せらるゝよし東鑑に見えたり。その後、正親町天皇の、永祿十年十月十日、當國、信貴城主、松永彈正久秀の兵火にかゝり、大佛殿、また灰燼となりて、頭も燒落ちけるが、それよりこのかた、亂世うちつゞき、再興の事も絶えたりしを、當國の武士、山田道安といふ人、財をなげうちて修補を加へしが、即ち、今の佛像なり、されど、殿宇の再建なく、百三十餘年を經たりしを、東大寺、龍松院公慶上人再興せり。これ今の佛殿なりと、公慶の大佛殿再建之記に見ゆ

衝口漫言（五）

白松園主人

○服裝改良研究所

を設け、男女が服裝頭髮履物に關する事を、調査

研究せしめ、年々の流行、滔々として底止する事を知らざる、高價にして不便あると、不衛生あるとを改めて、衣服上の一大進歩を促し、上中下に於ける品質の差別はありとも、形体上の一定は、法律命令を以て奬勵すると同時に、一方娼妓其の他風教に關する者の取締を嚴にすべし。果して此の如くなる時は、形の上に於ては風教の改善を全うし得べく、漸次市井坊間に行はれて、風教を害する上に、非常の勢力を有する、常盤津清元浄瑠璃の如き者に、嚴重ある制裁を加へ、流行歌俗謡をも取締るべし。以上の卑見、稍や過激峻酷に失するかは知らざれども、物の實行は、斷斷乎として非常手段に訴へざれば、常に姑息偷安に流れ去りて、改善の曉を見る能はざるは、多辯を要せざる所也。世人及び當局者、以て如何となすにか。


札幌の花賣

○太宰春臺の明

太宰春臺は、夙に浄瑠璃三味線の風俗を害するを惡み、之を禁ずるに非ざれば、世の名教を維持す能はざる者とせり。故に其の著書獨語に於て、筆を極めて之を排斥し、淫靡鄭聲の甚しきは、之に過ぐる者なしとせり。嗚呼太宰氏の明は、よく二百年後の今日を洞觀せりといふべし。太宰氏の性質嚴正にして、三絃浄瑠璃の婬聲淫靡あるを慨せしことは、當時氏を知れる人の諸書に見えたり。

○平野金華の浄瑠璃ずき

金華氏壯時、千田玄智（徂徠此人ノタメ墓碑ヲ作ル）と云ふ人の世話にて、學問せり。この千田と云ふ人は、殊の

外嚴ある人にて、常々戒めて淨るり本、又は咄本などを見せられず。金華或時咄本を書物屋に借りて、玄關に見て居りし所へ、歸り來りぬ。勢ひ隱し得ざりしかば、則其本をとりて、切割き、火にくべられたり。又棊を打つなど門人を戒められしに、棊をうちしかば、其の棊盤をうち碎かれしとぞ。此の如き嚴重なる人に育せられしかど、金華氏は一生放蕩に暮したり。姑息手段にては、到底、社會人心の墮落を擁止すべからず。

○南留別志

祖徠の著書南留別志は、言簡ある隨筆ながら、卓見の辭多く、翁が博學の程を伺ふに足れり。されば、當時は、此の短篇の書をもひき出でゝ、言語に關する意見を述べられし條を、言語學史の中に入れたり。但し、こは、祖徠が力を込めて書かれしものに非ず、所謂お茶漬前のすさびに記されし斷片なりしを、後世を益する事此の如く大ならんとは翁も思はれざりしならむ、之れにても先輩が學問の一端を伺ふべし。左に、その證を示す。

一、ナルベシ物語ハ、徠翁ノムダ書ノ、書付テアリシヲ、何人カ、ナルベシ物語ト名ヲツケタリ、又板行ニモ出デタルユヱ荻生三十郎ヨリ、町奉行ヘ屆ケテ板本ヲウナ破リタリ、云云(文會雜記)

○悉く書を信ず可らず

盡く書を信ずれば、書なきに若かず、とは古より云ふことながら、此の頃、湯淺常山の文會雜記を見しに、近來の學者、皆酒量ありといふ段に、祖徠は下戶也とあり。民友社より出し、十二文豪の祖徠の傳に、祖徠をもて、往々、前後不覺に醉ひ潰るゝ、大酒家の如くかきなしたり。今にして、祖徠の面目を想見する者は、翁がよく大言壯

語するをもて、まこと、大杯を舉げて痛飲せしにこそと思ふなり。但し、事實は、多く想見と齟齬する者なり。常山は、南郭の弟子なれば、之の人の言、疑あきことゝいふべし。

教の庭



九月廿日兼題

月前雁

天　東京芝區愛宕町三ノ六　穗積稔子

秋かせにこゑをほにわけてくるかりは
　つきのみふねのからろおすらん

評に曰、頗力あり、調つゝきもはなやかにして、いとくめでたし

地　東京駒込東片町　北島功子

すみのはる月夜よしとやわくかれて
　なきはたるらむかりのひとつら

評に曰、こゝろことは、よくとゝのひて、調高し

人　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

つらありてあきゆくゝ鴈の音もさやに
　すみこそはたれわきの夜のつき

評に曰、優にして力あり

甲之部

武藏　河田いし子

はれわたる月夜よしとやおもしろく
　あきてすきゆくはつかりのこゑ

安藝　坂本光子

をすまきてかたみにめづる秋のよの
　つきをよこきるかりのひとつら

前筑　鋭山増代子

久かたのくもゐにかりのかけみえて
　よるとしもあきつきのかけかあ

三河　早川種子

つきふけて夜寒のそらのかりかねは
　ものおもふ身のともとなりけり

乙之部

林　環子

なきわたる雁の羽かせにくもはれて
　くまなきそらにすめるつきかな

月きよみともまちなれはめつらしく
はつかりかねそたかくきこゆる　近澤和子

秋かせにたなひくゝものかけはしを
つきのひかりにかりなきわたる　内田さだ子

大そらのうみをよこきるかりはしも
つきのみふねにのりてきにけむ　上原のぶ子

秋かけてちきりしことをすむつきに
おもひいてゝやかりは来つらん　徳永茂孫子

なきわたる雁のかすさへよむはかり
すみこそまされあきのよのつき　山田米子

有あけのつきおちかゝるやまのはに
かりのひとつらなきわたる見ゆ　岡田炎喜子

つきかけもすみわたりたる秋の夜に
あはれみにしむはつかりのこゑ　伊勢村花子

すみわたるうなはらとほく月てりて
そらにきこゆるかりのひとこゑ　荒井滿武子

月みむとあふくみそらをうれしくも
かりのひとつらなきわたるなり　梅村花子

天津かり聲をほゝあけてさやかにも
さきのみふねやさしてきつらん　八尾家子

からろおす音ときゝしはつきのふね
さしてわたれるかりにそありける　片山綾子

遠やまをなきてこゆるはつかりの
かすさへ見ゆるつきのかけかな　片山次子

くまもなしすみのほたるもちつきの
夜ころよしとやかりもなくらん　北島操子

あきもはや夜寒おほねてつきかけの　本多きよ子

さゆるみそらにかりなきわたる　河合ぬひ子

かりあけし水田のおもにかけみねて
さきによしとやかりはきぬらむ

さやかなる月にまちかくきこゆなり
いつくにやとをかりかねのこゑ　樋口孝子

丙之部

秋のよのくまなきそらにつきふけて
たのもにおつるかりのこゑかな　荒野たに子

ぬは玉の夜ふかくわたるかりはしも
つきの出つるをまちてなくらん　千葉京子

ねもやらてと渡る雁はよしすから
こゝろやつきにあこかれぬらむ　村上操子

月かけのすみわたりたるおほそらを
わか世かほにもかりのなくなり　田村多豆子

さやかなる月をもよそにかりかねは
いつらいそきてなきわたるらむ　坂本てい子

秋かせにつらもみたれすあまつかり
くもまのつきになきて来にけり　衣笠淑子

夕つきのかけおちかゝるやまのはを
なきつれてくるあまつかりかね　佐々小芳子

ひさ方のつきのみふねのさをなして
あまつかりかねわたりきにけり　佐々有郁子

すむ月にかすかく文字とみゆつるは
くも路をたとるかりのひとつら　徳永識子

くまもなく照すみわたるあきのよの
つきにみたれておつるかりかね　澤田春子

雲間もるゆふつきくらき小やまたの
ほのへさむけくかりなきわたる　横田音羽子

かりの鳴野なかのなかの木の間より
ほのめくつきを見出つるかな　濱田鄕子

さよふけて石やまてらのつきゝよく
かたゞにおつるかりのひとつら　岡山冥子

秋かせのおともしつかにつきふけて
田の面におつるかりのひとつら　源たけ子

月きよみかれの音さゆるこのゆふへ
なきこそわたれかりのひとつら　福原菫子

とう雁の羽かせにくもや晴れつらん
ひかりさやけきあきのよのつき　山田稲子

湖すみのたまつさなして久かたの
つきのあたりをかりなきわたる　安居鏡子

さやかなる明石のうらのつきのよに
こゑをほにかけて雁は来にけり　吹田たけ子

つく〳〵とむかしをしのふ月の夜に
かりの一つらなきてすきゆく　岡田柳子

夜をこめてまちにしかひはあり明の
つきにうかれてわたるかりかね　安井みし子

ねさめしてさやけき月をなかむれは
なくねさびしきかりのひとつら　伊勢村春子

初かりのこゑなつかしみ出て見れは
はやつきかけはかたふきにけり　竹村竹里子

たちまよふ雲かと見れはすみわたる
つきになき行くかりのひとつら　篠田園子

ほのかにもかりのひと聲きこゑけり　生駒はる子

こよひのつきをたとりゆくらむ

はしゐして月なかむれはうれしくも
すめるみそらをかりわたるなり　松村あさ子

初かりのつはさのかせにくもはれて
いとゝさやけきあきの夜のつき　青木たゑ子

月の夜にうみへにいてゝなかむれは
いつくともなくかりかねきこゆ　瑞井千代子

ひつちはら設つゆさむくてるつきに
なく〳〵わたるかりのひとつら　戸賀崎治子

さ夜ふかくあまてる月にくまなして
かすもあらはにわたるはつかり　戸賀崎久子

萩の葉のおとにねさめてつき見れは
ひとつらわたるかりそなくなる　牛山崇子

秋はなほ照りまさりたるつきかけに
かすさへ見えてかりわたるなり　横山芳子

影きよきつきにうかれてなくかりの
こゑおもしろきあきのよはかな　梅村玉子

さやかなる聲もきこえてはつかりの
なきゆくそらにすめるつきかけ　椎野秀子

てるつきにかりのたまつさほのみえて
たよりまつ身そおもひわひぬる　椎野ぬき子

やまのはにさしいてそむる月かけを
わかものかほにかりそなくなる　椎野清子

つきまちてかりも雲路やいそくらん
おくれしともをかへり見もせす　椎野蕭子

はつかりの聲きこゆなりつきかけの
ほのめくそらにかけは見えねと　松澤まつ子

かゝみなすこよひの月にうかれてか
かりもみそらをなきわたるらん　岩田春子

八千原もくまなく照らすあきの夜の
つきにみたれてわたるはつかり　中館やう子

まとゐして月見る夜中になきわたる
かりのたよりそうれしかりける　杉浦糸子

小夜ふけてくもゐにわたる初かりは
つきのみやこにこゑきこゆらむ　鍋田ふし子

秋の夜のつきのひかりのくまなさに
いまやとわたるかりのひとつら　戸塚鐵子

山の端をたちはなれゆくあきの夜の
つきになきつゝはたるかりかね　川村松子

初かりよ我かせのきみはいまはしも
こまかたあたりつきにゆくらむ　宮崎てる子

友よひてかと田まちかくつきゝけに
つゝもみたれてかりそおちくる　川中子てつ子

月見もといてにしひとのかつるさを
おくりかほにもかりなきわたる　小村琛子

月のすむをほそうれしきふるさとの
たますさかけてかりわたるなり　北島松子

おまつかり月のみふれにほをあけて
からろおしつゝいまやゆくらん　池知すみ子

すむ月のふけゆくそらにあきかけて
ちきりたかへすかりのきぬらん　武田かめ子

秋の夜はくまなくてらすつきかけに
みれにこすかりのかすも見ゆけり　大津谷峰子

わかれゆく雲かとみしはさやかなる　雨森つる子

はつかりの聲するかたをなかむれは
つきなよこきるかりのひとつら　高石登代子

にはかにも月にかゝれるよこくもは
つきよりたかくなきわたりゆく　服部萬子

ゆふ月のかけはかりかはやまのはを
かれてもまちしかりのひとつら　服部正子

うきくものひまもる月にかけみねて
わたらふかりのこゑさやかなり　三宅中枝子

更ぬらしいとそさへゆくつきかけに
はつかりかれのめつらしきかな　瀬戸ゑい子

秋の夜のつきさへすまのうらなみを
あはれさみしくわたるかりかれ　山本梓子

さやかなる月のみふねをこぎいつる
つはさにかけておつるかりかれ　千知波楢子

久かたのそらさやかなるつきかけに
からろにかよふあまつかりかれ　小池稲子

秋のよのつきかけきよきおほそらに
おちくるかりのこゑそ身にしむ　佐藤玄子

海はらやつきの出しほともろともに
こゑすみわたるかりのひとつら　澁口貞子

かりかれのこゑはきこねて夕きりの
つらもみたさすわたるかりかれ　小池芳子

なれぬおもひのあきの夜のつき

九月廿日兼題

月見に招く文

天　東京麻布區片兵衛町二丁目八十九番池澤田方　南郷ひろ子

みか月の頃より、いつしかと待れけんこよひよ。殿の中には、いかに榮えある御遊にこそは打そうそき居給ふらめと思ひ給へ侍るを。いかにそや、露をゐるしのむくらか宿、もれこん月の光も、中中に、けしうは侍るましと思ひ給ふるまゝ、したしき限り、打かたらひ、空行くかけをたのみつゝ歌に音に、心のまゝに遊びてんを。君には、さる御事定めもおはさずは、まねくらん尾花か袖をしるべにて、夕さり、わたりおはしてんや。いかでいかで、御かへし此の女の童にと、かくなん。かしこ。

地　福原董子

いつしかとまち渡りつる秋のなかばも、はや、今日とはなり侍りぬ。されば、むかしより、やんごとなきは、御玉だれの中より始め、尾花手向くる賤か伏屋に至るまで、今宵の月を、めて仰かぬはおはさぬとか。朝よりは、幸にも、ちりばかりの雲さへ見へ侍らざれば、影清らかに、いかばかり、氣色花やかならんと、思ひやられ侍り。つきては心なへる友どちとまどゐして、月見すべければ、外さまに兼事おはさゞれば、せひに、君にも夕より遊のあゆみを運ばせ給はりたく、せちに、待ちまゐらするになん。かしこ。

人　楢岡ひで子

秋風一朝立ちしより、いつとても、月見ぬ夜はなく候へども、わきて、今宵は、そらもさへわたり、心にかゝるくまもなく、一しほのながめに候。さて、知らせ給ふごとく、私事、今年は十五になり申候處、かねがね、よのことわざに、此とし今宵の月明かなれば、其の人一生の幸運なるべしとの事にて候。其の祝ひをかねて、月見の宴いたしたく、ことごとしういはひなど申上候て、さもなき御もてなし恥かしう候へど、東にむかひし二階にて、唯、こゝろばかりの物まゐらせばやと存じ候間。御妹子様御つれ遊ばし、夕つかたより、必ず必ず御出下されたく御待ち申上候。あなかしこ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

月ごとに月みぬ月はなきものから、わきて、今よひの最中こと、

日本支那かけて、たかき短き、老となく若となく、歌よみ、詩作のたしなみある人は、こゝの高樓にのぼり、かしこに舟うけて、望月のみちたらひぬる光を、琴かきならし、笛ふきすさぶ、心のちりを打はらひ、夜のふくるをもわすれて、あそびはべるとなんうけたまはる。淡がふせいほの、いぶせき軒の影にはあれども、上下へだてぬくまなき月のにほひを見侍りて、一盃くみかはしはべらなん。御意にもかなひたまひて、御車きしらせたまはゞ、いかばりか難有侍るらん。あなかしこ。

倉島いし子

暑つき夢もいまさめて、いつしか、秋の最中とはなりぬ。時節はめづらしき今日此頃の晴れ／＼しさに、さぞかし、こよひの月と一しほの景色ならんと、見晴らしの好き小亭にて、親しき友垣三人四人折つどへ、日頃このませ給ぬ琴のさらへをいたし、よもすがらめで明さんと存じ候まゝ、君にも、萬事御くりあわせ、御令妹光子の君を御連れ遊ばし、暮れ方までに、是非／＼玉歩まげられ度、くはしき事は、御目もじの節と申のこし候。あら／＼かしこ。

岡田柳子

今宵は、仲の秋の夜に侍れば、日頃親しき友どち打集ひ、月見のうたげ催したくと思ひたち侍り。幸ひ、空のけしきもいとよくはれ渡り候へば、定めて、さやけき月を眺めうべきと思はれ候。来給ふ御方とては、君も、常々睦ひ交らひ玉ふ學びの友なれば、いかで／＼、まげても、君の御出をと切に願ひ侍る。何の設けも候はねど、我庭も、此つ日、いさゝか手入いたし、殊に、祖母の草花を好む儘に、老の心を慰むしろにもとて、秋の七草庭もせに植わたし、今を盛りと、とり／＼に匂ふ花の姿、少しは床しう、月もいでなば、いかになどほこらるゝも、例の井の中の蛙のたぐ

ひにやあらむさはともあれ、思ふどち、限なき月をながめて、隔てなくうち語らふ楽しさは、如何ばかりならんと、夕べをのみ待たれ侍るを、とく嬉しき御返り事玉ひてよ。且は、いとあつかましき願ひは侍れど、久々にて、君のたへなる瓜琴の音も承りたくとてなん。あなかしこ。

菅ふぢ子

心もとなくあかしつる雨の、なごりの雲もいづこへかいにけん。空いとよく澄みわたり、木の間より洩れ出づる月影に、木々の梢には、露おき渡し、千草にすだく虫のこゑも、我おとらじと争ふさまぞいとおかしき。まして、今宵は、名にしおふ望の月とて、古へより、都ゐなかのわかちなく、皆、この月によせて、歌を詠じ宴を催しなどなしつるも、けだし、今宵の月によることならんと、そゞろ昔を忍ばれてなむ。此の月影の面白きを、むなしく獨ながめんも本意なき事にぞんじ候まゝ、歌友だちを御招き申、御趣向をれがひみやびの席を開き度、因て、御仕事御繰合せ、午後六時頃り御来車下されたく、待上たてまり候。かしこ。

藤原九蝶子

暦の法の改りたるは、三十餘りの昔には候へ共、今宵は、もとの中秋に當り候由なるに、わきて、中空には一點に雲だになく、いとよく晴渡り侍れば、月やいかにと、定めなき秋の空を頼みつゝ、いさゝか、日々の勤の苦みを慰めはやと、今日しも、學びやにて親しき誰彼と御約束致し置き候へども、折あしく、御許君には御多忙とて、お休みなされ候ひし故、今宵とて御ひまは御座なく候はむが、親しき御許君のかけ候ふは、いと口惜しき限りに候へば、御母上様に御願ひ、例の樂器御携へ、夕刻より御越し下され候はゞ、はにふの宿も、わきて榮ゆある夕べにこそは候はめ。同じ空の月に候へば、何方にながむるも異り侍られど、思ふどち

打ちつどひ、くさ〴〵の物語りに、諸々の君達の妙なる音樂をつれてながめなば、一入の興をそへ候はんと、いと〴〵ゆかしうこそ。必ず、御來臨のほど待ち上侍るになむ。かしこ。

井關りう子

今宵は、仲の秋の望の夜に候迄朔の程より、空いとすみ渡り、風さへたち申さず候まゝ、此の間落成致し候今戸の別邸にて、月見のまとゐ開かんとて、御出ねがひ上候。客人とては他になく、たゞ親しき學校の御とも達、[illegible]人のみにて候まゝ、御心おきなく、御出ねがひ上候。ついては、此の程より習ひ居候風琴を、御迷惑とは存じ候へ共、一曲御聞下され度、そのかはりと申候てはなめけの至りに候へ共、御許様の御琴一手にても宜しく候まゝ、御きかせ下され度、御爪ふくろは、ゆめ御わすれ下さるまじく候。殊に、今日は、道もよほど遠く候まゝ、あまりに御かへりおそく相成り候ては、いかゞと存じ候間、くれぬほどにと御出ねがはしく候。あなかしこ。

篠田皿子

世のことわざに、十あまり五つの歳の望の夜に、月明らかなれば其の人一生幸運なりとの事、まだ振り分け髮の頃ほひに、祖母君の、玉はせけるを、今宵、折々思ひ出しつゝ、あはれ妾が其の年には如何あらむと、只管、案じ煩ひつゝ、待ち侍りしも、まことや、光陰は矢の如く、はや、あすの夜とはなり侍りぬ。されば別に、こと〴〵しきあるじ設けも侍らぬ物から、唯、心祝ひにとて、日頃親しきお友だちに、甑酒參らせたければ、今日のうちに、思ふ御方々へ消息せよと、けさ、たらちめより申付けられ侍りけるまゝ、取あへず、かくは物しつるになむ。入らせ給ふは、かれて御許様にも極御中好なる花子の君と、秋子の君、その外、わらはの從妹にあたる常子とて、一つの年姉なる者のみなれば、聊かも心づかひし給ふに及ばず。たゞ、此の五つたり、例の南の二階に集ひて、己がじゝ、月の歌を詠し、はた折からの興に糸竹のしらべなどもたのしからむとの心組に侍れば、此の頃、よくかぞいろの君にきこえあげ給ひて、ふりはへて訪ひ給へるやう、せちに祈りまつるになむ。疾くよき御返しごと遣し給ひてよかし。先は、みじかき筆にて、右御招きまで。あら〳〵かしこ。

生駒はる子

いつか〳〵と待ち暮し居候九月十三夜も、はや、今宵と相成候。いげに。このならはしは、寛平法皇の敕より初まりしよしにて、いと古くよりの例なりと承り候まゝ、無氣にすごさんも、中々、本意なう候間、しるし斗りには候へ共、例の事など設けて、親しき友垣御招き申しよもすがら眺め度と存候。幸、大空には、ちりばかりの雲だにもなく、心とゝもにすみわたりて、すが〳〵しう覺え候へば、歌よみ琴などかなづらんも、さこそ興あらめと存じ、たのしく今宵を待居候。御なじみの澄子様にも、わたらせらるべく候間、柴戸のわびしさいとはせられず候はゞ、そもじ様にも、御妹子様御引連、夕刻より御來車下され度、さすれば、妹も大よろこびの事と存ぜられ候間、何卒、御都合宜敷候はゞ、是非共御出願上候。先は、右御案内まで。あらかしこ。

横山芳子

秋の最中の今宵、共に、月見んと、かれてちかひ候ひしに、丁度、前栽のおくれ萩、今なん眞盛りなるを、久さむらになく虫の音も二人にて聞かば、いかにあはれも深からんと存候。別に、御差支もおはさずば、たそかれころより、かならず、御出下され度、待たてまつり候。かしこ。

八尾家子

此頃は、いかにものし給ふらん。さても、早うよりまちわたりし

秋のなかばも、けふとはなり侍りぬ。幸ひ、朝よりかくもはれ〴〵しき天氣に侍れば、こよひの月のさやけさ、まのあたりになん思ひ給ふるを、玉簾ならぬやれをすかゝげて、ところせきつぼの内を、くまなくてらす光りを燈にかへ、月を題にて、當座をものし給はんには、いかにたのしうや侍らん。外に、客人もきまされん、御心あへる伴たちをも誘ひて、とく入らせたまへ。猶はたいめんの折にこそあなかしこ。

椎野秀子

三五最中の月かげは、限なく照りわたりて、いづれの地か、清らかならざらん。されどかねても知らせ給ふごとく、妾の父は、翫月の癖ありて、つねに、月影のさし入るゝ高樓を好み、年頃、住める處をば、影留樓と名づけたるが、猶、ものたらぬ心地して、ことし新居をおもひたち、吳竹の根岸の里に、さやかなれども、小樓をものし侍りぬ。月かげを招かんとてこそ。幸ひにも、地ひがしみなみに向ひたれば、花やかにさし上る月は、樓中清らかに照りそへて、上野の山の端に傾くにいたるまで、しばしも、影を收めず。父も、いとよろこびて、此の頃、桃月と號け侍り。さるに父は、にはかに某の君の大磯の別莊にまねかれて、海濱の月をめづる事となりぬ。はじめての秋の最中、たゞにすごさんも本意なければ、妾のおもふどちつどへて、へだてなくかたらひ、まづ箏をかなで、小督の昔を忍び、源氏の物語に石山の月をおもひいでなんとこそ思ひ侍れ。かくて、父の心をも酌み、あだにすごさゞらんには、妾も、いさゝか、興やおこすらむ。あはれ、御車を枉げ給はゞ、いかにうれしからん。あなかしこ。

松澤まつ子

今宵は、中秋の望の夜に候ところ、今朝の空もやうにては、定めて、今宵も、晴れ渡り申すべくと存じ、某所の別莊にて、親しき御友だち御招き申上げ、月見のまどゐひらき度候間、御妹子樣御伴ひ、夕暮時より、必ず、御出で願はしく候。御もてなしは、見晴す海面にうつらふ月の影と、此程より、習ひゐ候筑紫箏を、後の園に鳴く虫のねにかよはし申さすやと存じ候。一曲御聞き頂き度、あはれ、御もと樣の御箏、一手にてもよろしく候間、御聞せ下され候はゞ、虫も、一層聲ふりたてゝ、月も、一きはさはやかにはわたるべく、御箏使の者に御渡し給らば、いと嬉しう存じ參り候。先は、右御案內まで。かしこ。

桝田啓子

私こそ月のとの給ひけん光りは、老となる者とも覺へ侍らず。玉しきみてる御園は、さることながら、梅の匂ひはやふしわけければにや、むぐらにとぢし伏やが庭も、ありしやう侍りて、おかしきふしも侍れば、中川のやどりならずとも、あやしの垣ほに、咲きほこれる夕顔の露分け給ひなんや。月の光りにもいやます玉の御しらべ承らまほしく、秋の下葉に、人まつ虫の音にたてゝそゝのかし侍るになむ。

久方に月にひもさく夕がほの
はなのかきれに君をしぞまつ

北島功子

月清き今宵を、いかに眺はさせ給ふらむ。君も親しき何子の君、と打つれて、今しむぐらが宿をおとづれたまひぬ。折から、咲きこぼるゝ小萩がせにくだくる月影も、いひしらずおかしきを。いかに。さゝわらせ給ふこととならば、今よひ一夜は、高樓にそむきて宴給れ、鳴く虫しげき蓬生の露分けひれや。はからざる月見のむしろひらかんとおもへば、まげて〳〵、裳かいやり給へかし。さらば文もたす此者を、眞儀のみ迎にとは供へつ。いそぎはしりがきのなめげをば咎めたまはざれ。かしこ。

大谷津みれ子

白露の、所せきまで置きわたし、秋も、や〻、たけなはなる折しも、新月の頃より、なよびおりおりつ〻待ちたりし望の月も、愈よ、今よひとこそはなり侍りぬれ。へだてなき友がき三人四人うちつどひいさ〻か、うたげのむしろ開き、夜もすがら、愛であかしんはいかに。つくろはぬ庭の面に、秋草のおのがじ〻咲き亂れたるに、玉と見るまで露の置ける、鳴きよはりたる鈴の虫の音など、いさ〻か、こよびのあるじまうけともなり侍らんかし。いかで、かねての申請たがひさせ給はず、草ぶかき吾が家にみくるままげさせ給へや。かしこ。

琛岡あき子

三日月の頃より待ちし今よひかなと云けんも、宜なるかな。げに今よひは三五月の月とて朝のほどより、空よくはれ渡り、心に隈る雲もなく、かくては、夜に入りては、一入さやけかるべく、まして、山の端よりさし出る月かげの面白からむを、ひとりながめんも、いと惜しく侍れば、親しき友どち打集ひ、上野の別莊にて、月見のまとゐ致し度く侍れば、君にも、御車うながせ給りたく、なほ、其の折には、かねて御たしなみの須磨琴、一曲承り度、く候へは、大空の月と共に、けがれたる心もすみ渡り申べく候。

あなかしこ。

高石登代子

二千里の、外までもと、詠みけんからうたも、まことや、秋の最中は、ひとしほ、めで度おぼゆ申候折から、今日はしも、朝のほどより、空いときよう、晴れ渡りたるも、いと〳〵うれしう存じ候。今よひは、年ごとのためしにまかせ、友達打つどひ、望の夜の月見のまとゐを開き度と、存じ候ま〻、よろづ、御くり合せ、たそがれ頃より、御出まし遊ばされ度、御まち申上候。殊に、あはれに、歌ひ出つらん虫の、様々なき〻ながら、姿らも、かたみに、おとらず、歌よみはげまんも、いかに。面白き、すさびにはおはさず候や。よろづは、御目もじの上、申上べく候。かしこ。

依田きと子

今よひは、兼て相待し十五夜、例に依て、別莊にて月見致度存候。あなた樣には、年々、武藏野の明月を御賞觀相成候へば、珍ら敷は無之候はむも、又、田舍の月見も一興に御座候まゝ、今よひ六時を期し、御入來相成度、御使申上候。此の地姥捨は、四方の雅客つどひ候處、殊に、近年中央線の連絡せしより、一層にぎはひを増し、此驛にては、一望の内に五驛の「スチーイション」を眺むるの絶景あり。往昔の閑雅を換へしは遺憾ながら、山は、太古に替りし事なく、境内鏡山に懸る月をおんめにかけ度候に付、聊か用意致候まゝ、必ず御光來を待上候。あら〳〵かしこ。

依田なな子

きのふと、暮らし今日と過ぎ、早、今日は、指折數へて待ちし、中秋の月見となりたれば。なんとなく、嬉しき心地して、空を眺めしに、晴天なれば、只今の模樣にては、定めて、今よひは。晴渡り申すべくと存じ、あなた樣方御招き申上げ、月見のまとゐ致したく。思立ち候。此頃新築致し候別莊は、少しく遠くして、見ぐ苦しくは候へども。見晴しのみは、よろしく候まゝ、御操合せ、御出下され度、何の設けもこれなく候へども、福引などを致し、また、餘興として、法師を招き、三曲ひかせ候心得に候。外に、客は、御前樣の御友どち、四五人招き候のみ、故御妹子樣御つれ成れ、御散歩ながら、夕景より御こしのほど、待入り申候。先は御都合御伺まで。かしこ。



樂園

吉野紀行

下田義天類

高田にて南和鐵道へ乘り替へ葛驛といふ所まで行かむとす。停車場内にてゆくりなく玉城勝雄ぬしにゆきあひたり。此の人は、廣島の人にて、神職中の有志家なり。早くより、東京なる全國神職會のことにあづかれる人なれば、さるかたのことによりて、屢いてあひたる事ありて、いと親しき中らひの人なり。思ひも寄らぬ所にてゆきあひたれば、いづこよりと問ふに、こたひ、伊勢の總會にものして、そのかへるさなり。此のわたりに、あひしれるものありて來たるなりといふ。伊勢のこと共、聞かまほしかりしかども、滊車いま只今いでなむとすとて、人々立ちはしりゆきかふをりからなれば、かたみに、あわたゞしき心ちして、西と東とに立ちわかれぬ。殘りをしきことかぎりなし。さるは、此の伊勢の總會へは、早くよりおのれもものせむ心かまへなりしを、何くれと事しげかりければ、その機におくれて、えゆかず。こなたさまへのみ、たゞ越えにこえ來つれば、そのありさまも、いかにありけむと、心にかゝれるをりなればなりけり。玉城ぬしが乘れる滊車のいでゆくをながめゐるほどに、わが乘れる車も、とゞろきそめたり。たぎちかへれる湯氣の音なひ、滊車窓の外にかまびすしかりしが、漸々うすれゆきて、ダーブダーブといふひゞき、六つ七つはかりつゞけさまに聞ゆるほどに、滊車は、既に停車場を放

れたり。新莊、御所などをすぐるあひだ、かつらき、金剛山をうちながめつゝ、掖上の停車場にいたりぬ。こゝには掖上の宮趾あり。東山に、あり〳〵とをがまるゝ御陵は、齊明天皇のみさゝぎなり。滊車窓のうちより、うや〳〵しく拜み奉る。このほとりより、かたはらにありける若き男のものいひ、耳に付きそめたり。これも、よしのへと心さすものなりといふ。あひともになといふまゝに、よき道しるべならむとて、さしゆるしつ。ゆきゆきて、滊車は、葛驛にはてたり。こゝより、吉野町迄は、四里なりといふ。直に、人力車をやとひてかけらす。此のわたりに咲けるさくらは、花ましろにて、柴やゝあかみたちたる山さくらなり。吉野の花も、皆、このたぐひならむとおもへば、ことにゆかしきこゝ

野幌遠佳者居宅



ちせらる。空やゝくもりて、夕だちも、すこしけしきだちたるこゝちするに、道の邊の梅の花、雪のごとくふきみださるゝさま、えもいはれずきようあり。いかにもして、こよひの内によしのへ入らむと思へど、車に綱ひきをそへて、ひたはしりにはしらす。

夕まぐれいそぐ車のわだちにも

花ちる道はよきよとぞおもふ

下の莊にて、日またく暮れはてたり。夜氣あたりをとざして、旅衣の袖、なごりなくうるほひゆくに、棚橋ぬしのみこゝちいかがならむと、心許なく思ひやらる。六田のわたし場にて、暫時、車をとゞむるほどに、彼の同行を契りたる男も、おひつきたり。六田川を船にてわたる。これ、即、よしの川なり。こゝよりは、人をそへねば車をひきわけがたしと

いふによりて、三人の車は、あとよりひかせて、かちだちにてのぼる。やみの夜なれば、あやめもわかず。車夫に道しるべせさせて、のぼりゆくに、けはしきことかぎりなし。車などひきあぐべき道とはおもはれず。皆、からぐるまなれど、おしあひひきあひしてのぼる。からうして、登り詰めたる所は、吉野の町はづれなり。あとにて聞けば、こは裏道なりとぞ。道の邊のさくらの樹とともに、とうろかけつらねて、そのもとに、くゝつめくものに、三味線ひかせなどして、酒のみ興じゐる人人あまたあり。宿ひきといふもの、わづらはしきまで袂にすがりてうるさし、東南院にゆきつきたるは、午後の九時ばかりにやありけむ。

よしの山夕風さむし道もせに
花のしら雪ちりまがひつゝ

こよひは、大阪なる醫學校の學生等、修學旅行の餘、こゝにきたりて、この寺に宿れるほどありとて、いと／＼立こみて、ものさわがしきさまなり。彼の添書をいだしければ、かねて、尾張の柴田ぬしより、別に郵書もて、わがくる事を知らせおきたるげにて、あるじの五條順海ぬし、みづからたちむかへて、まめ／＼しくもてなしのゝしる。あるじの方丈にあんないせられたり。方丈とはいへど、十疊の間なり。次なる間もまた廣く。湯あときかふほどに、酒肴調とゝのへてゐるしす。三百人にあまれる人の宿れりといへと、こゝには、かけ離れたれはにや。おもひの外に、もの靜なり。この外にも、こゝにやどれる花見の人に、猶あるよしなれども、皆、しづまりたれはにや。谷川の音、はるかにすみはたりて聞ゆるなと、こゝちよきことかぎりなし。あすは、吉水宮より勝手の明神にまうて、中の花をみて、如意輪堂にいたり、

塔尾の御陵をふしをがみて、上の千本を見物をなしつ、あと、あらましことかたりあふに、ゆかしきことかぎりなし。

夜もすから枕に清しよしの山
夢路をあらふ谷川の音

此の紀行、あまりに長くありて、六日の菖蒲にも立ちおくれにたれば、本誌に掲載せむことも、あまりにつきなかるべしとて、こゝに、暫、さしおくことゝしたり。吉野は、觀客諸嬢の知らるゝごとく、山水の明媚なる上に、日本一の花の名所なり。加ふるに、歴史上のものがたり、八尾八谷にみち〳〵たれば、この所の記事ばかりにても、ことしの内には、かゝげ盡しかたかるべし。ことに、此の行、大和路の諸名勝をとひ、京都にかへりて御室の花を見、あらしの山のおそさくらをたつねて、波の龜岡に出で、保津川の勝をきはめて、あまたの日子を費したることなれは、したがひて、その記事もいと長し。こと〳〵に、これを掲載せば、明年の花時をすこしても、猶、あまりぬべし。されば、また、をりを得て、その所々をきりぬき、ものすることもありぬべけれど、一先、こゝに掲載を中止することゝすべし。

自然の美

夏の夕

音無瀬子

浴みしはてゝ、門の外に出づれば、鉤の如き三日月は、はや、産土の杜に入らんとす。蝙蝠遂ひつる小供、牛つれかへる農夫に叱られて、覺えず、竿をとり落せば、籬の夕皃二三輪、はら〳〵と落

ちぬ。見かへれば、いつのまにか、燈のかけ、細く長く小川の水にうつりて、吹きくる風秋の如し。

靜寂

銀河漸く低れて、かたわれ月中天にあり。乾坤靜にして寂溪水の音ひとり寂寞をやぶりてひゞくあるのみ。風全く死して、萩の葉にそよりとの音も聞えず。あはれ、すべての人が、惡を離れ欲をわすれて、神に接觸せるは、只此時のみ。我獨り起て徘徊すれば、青白くして凄き月影は、冷かなる笑をふくんで、あざけるが如く我を照らせり。忽ちに、犬の遠吠をきゝて、かへりみすれば、流星一道、光芒長く曳きて遙に天外に落つ。

秋の色

門邊の早稻田に、はしり穂見えて、葉末にぬける露のしら玉、はや、秋の色あり。眞垣の木槿馬にも食はれず、芝生の女郎花人待顔なり。小さき花さ

く豆の畑に、いと大きなる瓢を見いだしたるもをかしく、促織てふ虫の、嫁菜のかげよりいでたるもつきづきし。綿の花の黄なる、秋海棠の薄紅なる、穂ふくめる尾花、亂れそめにし萩が花、いづれも、あはれならぬかは。蕾のおもしろきは桔梗、葉のうらはしきは雁來紅、衣にするてふ鴨頭草、うらみかちなる眞葛の花、紫苑、吾毛香も、いかでかよそに見るべき。うれしきは秋のいろなるかな。夜は、まだはしの見ゆる稻妻の影、鵲のわたせる橋の天の川、いづれか、秋のいろならぬ。ましで、一葉二葉ひらりと散りし梧桐の梢に、洗ひし如き銀の月、いとさやかにさしいでたる、これぞ、眞の秋のいろなるべき。

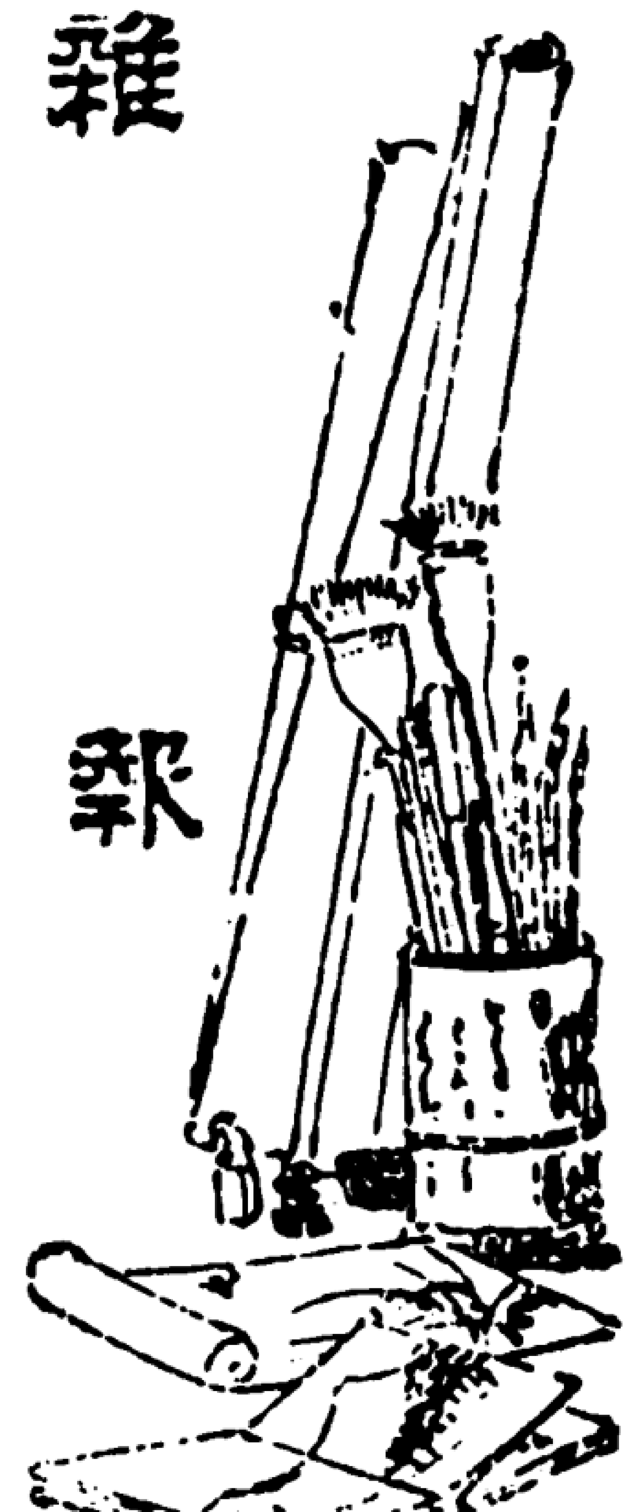
北海道旅行記

桜亭生

旅行記は、盛暑中が價値なのだが、生の出立が後れた、秋園に桐ひと葉と云ふ時候になつて。しまつた、氣のきいた化物は引込時分であるが、然し新聞雜誌共に澤山な避暑の案内やら紀行なぞが掲載して有る時分より、一人舞臺で、のんきにやるつもりだ。そのかはり、見物人の無いのは覺期の上の芝居で、加ふるに、役者が御下手と來て居るから、とても、見物を滿足さしる事は出來まい。兎に角、只々、北海道までの事を並列させて見やう。ヲイッチ二三、ちりん／＼。八月十七日午前九時發青森直行列車のこわいろである。東臺の森樹から、斷えて凉風を送つてくれるが、車中は、なか／＼熱い。扇子は、蝶群の風に舞ふが如く、バタ／＼然たり、ガサガサ乎たり。四方楚歌の聲でなくて、炎熱の苦情わくが如しとは、すこし大げさの樣で。寒暑共にこぼすとは、人間も、なかなか勝手者である。くるまの動くと共に、停車場をはなれた。第一着が、田端のステーションで常磐線の分岐點である。北は一望數十里の平田で、只一ッ筑波山が湖なる色に、ッイ立の如く、そびえて居る、近く、尾久、三河島諸村の靑田が、あを疊の樣になつて、豐作を示して居る。王子は瀧に出かける人で、なか／＼雜沓していた樣で有た。王子、赤羽とすぎ、大宮に付いた。こゝは、官幣大社氷川神社のちん坐ましまず處で、境内は、老樹森々として、さながら仙境だ。林間、逆旅と割烹とを兼た家が有て、近郊の消夏には、なかなか宜所で、町より西には、日鐵會社の爲大なる器械工場が有つて、繁盛な土地である。此の奧羽線は、車窓からは、實に景色にとばしひ所で、去

る人が、平山凡水と云うたら、又去る人は、愚山劣水だと云ふたさうだが、實にその通りだと思ふ。然し、見かたと取りかたで、は、まんざら捨た物でもない。生が眼を以て觀ると、誠に、好畫題と思ふ所もある。一例を擧げて云はふなら、限りなく廣き田畑の中に、こんもりとした黑き杉の森、中ば朽ちた赤色の堂、その廻りをめぐるはせきながれ、無造作の板橋、橋下の瀉澤花、むらわらへの河遊び、凡々たる樣だが、是ぞ、ひとつの好畫題は出來るのであらう。北に進むに從うて段々滿足の出來る畫題があらはれて來る。十時何分かに久喜の停車場へ着した。東武線の終點で、こゝは、いつも、停車時間以外に、長待をさせられるので閉口だ。苦氣停車場とあらためる方が宜しい。今日も、例の通りヤ、五十分の籠城ではない、籠車をさせられた。あくび車と苦情車とが、車內にたて籠つて、フラットホームの熱氣の大砲が、遠慮なく庫中へ射込んで來る、釜中の魚とは、イヤハヤ之の事で候ふと思はれた。ピーと云ふ車掌が出車の相圖笛は、百方のゑん兵が着して重圍を解いてくれた時の樣で、ほつと一いき。勇氣は、たちまち、千百倍に。先づ一ぷくと始めると、涼風襟をかすめて來たつた。首をあげて見ると、栗橋の鐵橋が、滔々たる坂東太郎の上に跨つて得意然としてゐる。河水は氷の如く、青堤長蛇の如く、眞帆かた帆の船ゆるく浮かんで上野の山は、起狀長く裾を引いて、武の諸山と相會して居る。岸邊の柳陰、垂釣の人、いづれか畫あらざるはなした。これも須臾の間、天然の寫眞器へ彩影したのである。(未完)

雜報



○紫雲靉靆

●神宮御遷座式　本月六日は、朝來曇天なりしが、伊勢山田にては、御豫定の如く、午後六時、奉遷勅使掌典倉田秋輔氏、黑の衣冠にて、與謝野掌典補、品川式部屬を從へ、神宮司廳の馬車に乘じ、橋本、吉田、堤、新納等の三重縣諸警部等騎馬にて、櫻井造神宮副司之に次ぎ、儀仗兵として、步兵第三聯隊より一個中隊丈け、內宮第一鳥居內に整列、八時、神宮臨時御遷座の御式を執行せられ、倉田奉遷勅使、並に、賀陽祭主の宮には、第二鳥居にて、修祓式あり、一同本宮に向ひ參進、之より御次第の通り、いと嚴肅に、御本殿より東方殿へ、奉遷の儀滯りなく、相濟みたりと云ふ。

●御遷座御遙拜式　同日皇太神宮假殿御遷宮式御擧行に付、宮中に於ては、午後七時より、岩倉掌典長、戶田式部次長、以下、各、掌典式部官は、宮中神嘉殿南庭に設けさせられたる屋舍に出仕し、中央に簀薦を敷き、御屛風二雙を立廻し、其中に、玉座を設け、其前に、燈臺二基を供する等、萬の準備を調へ、川口宮內次官、其他、宮內官は、庭上便宜の所に參候し、八時に至り、德大寺侍從長の奏薦に依り、陛下には、南庭に下御あらせられ、恭しく、御遙拜の式あり、終つて、皇后陛下にも、御遙拜の式を濟ませられたりと承はりぬ。

●臺灣神社祭典の準備　十月廿七、廿八日、擧行と定まりてより、臺北の市民は、其の準備に忙

かしく、內地人は、二百餘名を網羅して、委員會を組織し、村上臺北縣知事を委員長とし、九月一日、總會を開きて、祭壇係、會計係、餘興係、植樹係の分擔を定め、島民も、百二十餘名の委員を撰定して、協議する所あり、既に、決議を經たる島民の催し左の如しといふ。

▲臺北市民の名を以て、祭品を奉進し、祭儀を奉行すること、▲一切の經費は、寄附金を以て、支辨すること、▲祭典會計委員、餘興委員を置くこと、▲各員に、一定の徽章を附着し祭典中、休憩所を要地に設くること、▲御紋章を附したる大燈籠を、要地に點じ、尚ほ、各戶の裝飾として、洩れなく點燈を爲すこと、▲演舞臺、樂舞臺を設くること、▲奉進すべき祭品の次第は、

猪羊一頭宛、(牲として)滿漢全筵、支那料理の最高等なるもの萬物、菓子、香花、蠟燭、線香、爆竹(何れも支那の典例に準じて奉進す)▲祭儀祭事委員中より、總代一名をして、三獻禮(支那典禮の天を祠る儀式)を奉行す、次に、祭文宣讀、各員禮拜、▲餘興の種類は、演武競渡、(端艇競爭の如きもの)女樂の女優音樂、煙火(何れも支那の制式に依りて行ふ)

●●●●●●皇族御渡臺　來月廿七、八の兩日を以て、臺灣神社御祭典執行に付、兒玉總督よりは、各皇族方へ、御案內申上げたるに、何れも御渡臺相成るべき筈にて、萬一御差支の節は御代拜を遣はさるる由なるが、故北白川宮妃富子殿下は、必ず御渡臺、親しく御參拜あらせらるゝ筈なりと。

●●●●●●臺灣官吏の醵金　臺灣神社御鎮座式の費に寄附せんが爲め、同總督府、判任官以上の文官は、月俸二百分の一を醵金することに、內定したりと。

●●●●●●臺灣神社鎮座式紀念切手　臺灣神社、御鎮座式執行に付、同總督府にては紀念として、大祭當日より、同神社眞景を現はしたる郵便切手五百萬枚を發賣する計畫にて、既に、主務省の認可を經たり、初め、主務省に於ては、時日切迫して、印刷間にあひ兼ぬる爲め、其の發賣を、臺地に限る意見なりしが、總督府にては、內地に於ての發賣

を希望し、目下交渉中なりと。

◉迪宮殿下の御還京

迪宮裕仁親王殿下には、御還京のため御暇乞として、本月二日、田母澤御用邸に御參候、皇太子、同妃兩殿下に御對顔あり、三日は、御豫定の如く、午前十時朝陽館御出門、川村御養育主任、木內、小原兩侍醫其他侍者數名の供奉にて、日光停車場に向はせられ、高辻侍從長、中山從一位、柳原權典侍日光町長、御見送り申上げ奉り斯くて、停車場に御着便所に於て御少憩の上、午前十時四十五分御發車あらせられたり、宇都宮には、五分間御停車の筈ありしを以て、御休息の爲め、特に、便殿を設け、プラットホームには、溝口知事、水木警部長、天島町長、及、同町小學校生徒數百名整列して、御待ち申上げしに、御豫定の如く、正午御着車あそばされ、御降車の上、暫時御休息せさられ、同五分御發車、午後三時を以て、上野に御安着あらせられ、便殿に於て、五分間御休憩の上、川村伯夫人、及、御乳人御陪乘、供奉諸員を從へ御順路を經て、麻布狸穴なる川村伯邸に御歸着相成りたり、當日同停車場に奉迎したるは、田中宮內大臣、川口次官、香川皇后大夫、山內同亮、岡侍醫局長、千家知事、鍋島侯、佐々木伯、橋本博士外數名にして、日本鐵道會社より曾我社長は、大宮迄久保運輸課長は、日光迄御出迎ひ申上げ、赤十字新看護二名、及、侍者二名は、日光より御陪乘申し、川村伯令息、幷に、女官二名は、御先發として、先夜九時着の汽車にて歸京せり。

●函館に於ける閑院宮殿下

函館に御滯在中なる閑院宮殿下には、八月卅一日午前八時、御旅館を出でさせられ、佐藤警視御先導申し上げ、園田長官、大藏少將、小泉參謀長、其他、要塞聯隊區の

武官、龍岡支廳長、林區長等隨行し、先づ、汐見町なる配水池を御覽あらせられ、夫より、公園地なる水產陳列塲を御一覽の上、開會中なる美術展覽會に臨まれ、各室の陳列品を御覽あらせられたる後、辨天町なる船渠會社に赴かせられ、同會社遠邑技師は御案內申し上げ、工事の一般、及、目下修繕中なる日高丸の工事、及、參考品につき、一々說明申し上げ、暫時事務所にて御休憩の間、辻邑技師に對し、同會社、經歷工事の模樣等、精しく御下問あり、御歸館あらせられたるは、午前十一時頃なりき。午後一時よりは、體育會函館支部の發會に臨ませられて令旨を賜はり、擊劍、柔術、相撲其他の餘興を御覽ありし上、午後四時御歸館ありたり。尙、殿下には、御豫定通り、一日午前八時御出發郵船會社にて御乘船として、特に回航せしめたる薩摩丸に乘込ませられ、御歸京の途に就かせられたり。

●●●●●天候奏上　二百十日以來全國の天候は每日漏なく、畏き邊に奏上せられつゝありと。

●●●●●●●第二回論功行賞御裁可　北淸事件に關する第二回論功行賞は、旣に、調査結了し、御裁可奏請中なる由は、屢、招導せしが、今回、愈、御裁可相成りたるに付、不日發表せらるべしと。

●●●●●●和宮二十五年忌　去る一日は、德川第十四代將軍家茂に、降嫁ありたる仁孝天皇皇女、靜寬院殿(和宮)の二十五年忌に相當せしを以て、德川公爵邸に於ては、當日嚴かなる法要を行い、芝增上寺に於ても、午前八時より、一山の僧侶廟所に參集し、式の如く讀經供奉等ありたるが、尙、京都智恩院にありては、午前八時より、同院大殿なる靈殿の厨子を開き、百味の精饌を供し、管長野上運海師大導師と爲り、光明寺住職秋浦淨立師、智

恩院住職山下現有師、清淨華院住職山田辨承師、其他、一山の僧侶出席の上、法要を營み、高崎府知事、外數名の參拜者ありたる由。

●・・・・・中山從一位局歸京　中山從一位局は、本月四日午後二時十分、上野着汽車にて、日光より歸京あらせらる。

●・・・・・・富美宮泰宮御歸京　富美宮、泰宮兩內親王殿下は、御豫定の如く、五日午前九時三十分、箱根宮の下御用邸御出門同十一時十一分國府津御發車、午後一時五十二分新橋に御着相成りたり、右に付、黑岩神奈川縣警部長は、鷲野警部を隨へて宮の下迄御出迎申上げ、周布知事、梅田市長、大谷商業會議所會頭等は、橫濱停車場に、川口宮內次官、田中宮相夫人長崎調度局長、其他宮內省高等官、及、女官等は、新橋停車場に奉迎し、兩殿下には、林御養育主任夫妻、園御用掛、鈴木侍醫、侍者等の供奉にて、直ちに、麻布の御殿へ御歸着あらせられたり。

●・・・・・御還京後の迪宮殿下　三日を以て、御歸京あらせられたる裕仁親王殿下は、日光御滯在中、至つて御健勝に渉らせられ、御還京後も、何等の御障りなく御哺乳、益々御達者の由にて、畏き邊へは、昨日、河村御養育主任、及、侍醫局侍從職等より、詳細上奏に及はれたれば、兩陛下に於かせられても、殊の外御滿足に思召されたりと、漏れ承りぬ。

●・・・・川村伯參內　去る三日、迪宮殿下に供奉して日光より歸京せる川村御養育主任は、四日午前十時參內、迪宮殿下、御避暑中の御摸樣より、御歸京後の御狀況を、詳細上奏に及びたるに、兩陛下には、御滿足斜ならず、種々御下問、及、難有御諚を下し賜はりたる由にて、退出の途次宮內

省に立寄り、田中宮内大臣、齋藤内事課長等と會談し、正午過ぎ歸邸したり。

●皇女より唱歌を賜ふ　常宮。周宮の兩内親王殿下は、去る明治二十四年、日光山へ御避暑の際同地小學校へ屢御成あらせられ、隨つて、學童等も、年々兩殿下の御出を待ち奉つる程なりしが、兩殿下とも、本年は函根へ御避暑あらせられしかど、尚ほ、日光小學校のことを思召出させられ、三田御用掛に仰せて、同校へ、歴史教育の愛國唱歌、八百二十部を下し賜ひしかば、同校教員、生徒等、感泣に耐へず、本月四日、同校第二運動場にて、拜受式を行へりといふ。

●閑院宮殿下へ獻納品　閑院宮殿下、北海道御巡回に際し、地方有志の献納せし物品中、重なるものは、旭川町民有志より熊皮一枚、小樽色内町遠藤氏より、鮭寒鹽引六尾、農學校附屬農園より、林檎、函館麥酒會社より、麥酒一函、及、ラムネコーセン、菊亭侯爵より、麥粉札幌麥酒會社、及、拓銀より麥酒、深川屯田より、兵村作物標本等なり。

●振天府拜觀　五日午前九時より、田中東京、岩崎廣島、鳥海京都、渡邊大阪、田中鹿兒島の各稅務管理局長以下十五名、及、山崎大藏書記官、水上横濱稅關長外三名、大橋司稅官外七名は岡澤侍從武官長の案内にて、振天府拜觀差許されたり。

●御兼題詠進　本月五日は、宮中歌御會の定日なりしにつき、各參侯錄事等は、午前九時より御歌所に參集せるが、御通題は下賜せられざりしを以つて、『御兼題』月夜越山』の詠進を一括し、畏き邊へ捧進して、退出したりと。

○綾羅錦繡

●鄭領事夫人と寶冠章　本邦にては、皇族を除くの外、寶冠章を授與せられしは、去る廿七八年の戰役に際し、日本赤十字社看護婦十六名に對し、勳八等寶冠章の授與ありしのみにて、勳六等寶冠章を授けられしは、鄭領事夫人を以て、嚆矢と爲す由なり。

●靜岡の孝子　靜岡縣庵原郡江尻新波止場字島崎三十六番地、鑄物職山中市五郎は(七十二)、內緣の女房つね(五十六)と、女房の連れ兒、常藏(十五)との三人暮しにて、物價騰貴の今日を、如何か恁うか活計を立て居れるが、悴の常藏は、年には似げなき大の孝行者にて、數年前より、風雨を厭はず、日々鑄物道具を載せし荷車を挽き、鍋釜の鑄掛けと聲を枯らして、市中を呼び歩るき、老父を介抱して、一日も孝養怠りなく、ことに、父は、大の酒好きなるより、所得の幾分を節して、酒を求めて父に勸め、若し、人の憫むで錢を惠みくれし時は、買ひ喰などをせず、凡て、母親の好なものを買ひ、之を土產として商先から戾るなど、心掛け他に類なきより、近所合壁の人々は、其志に感じて、賞めぬ者なしとぞ。

●神田の孝女　神田區猿樂町一丁目三番地、佐伯うめ(五十)と云ふは、實母るい(七十三)が、今より三十年前健忘症に罹りて、物の用に立たずなりてより、孱き女の手一つに、濯ぎ洗濯より針仕事炊きの業は素より、老母の介抱に心を盡し、孝養至らざる處なく、其の後世話する人ありて、佐伯某の妻となりしも、夫に請ふて、母を引取り、倘、孝養を怠らざる內、夫某は、九年以前に病死して、愈々賴みなき身となりしも、老母に仕ふる事以前に增して厚く、然るに、老母は、病氣の上追々歲

を積み、近頃は、全く小供の心に還つて、頑是なければ、手數も甚しく、殊に、牛乳を嫌ふより、三度共に米の粉を溶き、乳香器械にて飲ましめ、又、暇ある折には、母を乳母車に載せて市中を曳き廻し、其喜ぶを見て、此上なき樂みとなし居るは、珍しき孝女といふべし。

△悌實なる富子　岡山縣上房郡高梁町大字小高下、野島隣二といふは、家素と貧困なるが上、今より五六年以前より、精神病に罹り、父なる人は、高梁區裁判所に勤務中、腦充血にて斃れ、其の後は、母の監護を受け居りしに、間もなく母も病歿し、家計益々困難に陷り、今は、看護を爲すものなきに至りたるより、親族の許に養はれ居たる妹富子(十三)を呼び返し、之に看護を命じたるに、幼なき女子の身一つにて、小高下と稱する物淋しき所をも厭はず、朝夕の監護怠ることなく、始終一口の如く、暇あれば、麥稈眞田を製して、病兄の衣食の資に充つる等、其の志の憐れにも、また、健氣なるには、人皆感ぜざるものなしといふ。因に記す、本年三月、舊高梁藩士共濟會は、其行爲を奇特とし、富子へ金八圓を贈與せりと。

●四歲の少年人を救ふ　昨日午後三時頃品川新宿荒井敬藏の倅萬藏(四つ)といふが近所の女兒と同所品海橋上にて遊び居たるに女の兒は足踏すべらして半身を橋の外に出し、あはや水中に陷らんとなしたるに萬藏は、忽ち、その少女の左手を摑み、一生懸命に支たるも、幼弱にその身も橋外に引落さるゝ計になりたりしを、幸ひに、通行の萬朝社員之を認めて救ひ止め得たり、萬藏が、働きは、甁を破して、友を救ひし司馬温公のそれにも似たと、社員は大に賞揚なしたれどげに小兒は、神の使とて、格別誇る色もなく、莞爾々々打笑ひて立去りたり。

●筑波山の觀測量　山階宮殿下は、兼て、氣象學に御熱心なるが、此度、小名木川鈴木鐵工部に御注文ありて、筑波山の嶺に、觀測臺を設けらるる事となり、同部技手黑板工學士は、同山に出張して、踏查をなし、鈴木藤三郎、小野由太郎等、工事を監督し、既に、着手に及びたる由、竣工は十一月中との事なり。

●愛國婦人會　京都支部發會式の同支部發會式は、去る三日本願寺に於て開會せられたり、三百八十餘名の會員中、來會者百餘名に達し、當日入會を申込したるもの百餘名あり、先、高崎榮子開會の趣旨を述べ、次に、八田艶子、奥村五百子、并近衛侯爵の演說ありしと。

●裁縫講習會の實地講習　帝國敎育會内にて、小出新次郎氏講師となり、東京府下の裁縫敎員、其他、一般志望者に對し、講習中なりし裁縫講習會にては、十日、市内各小學校長を招き、講習生の實地練習を爲し、且つ、來賓の談話を聽きたり。

●高等師範學校の改善　伊澤氏の後を襲ぎて、校長に就任したる嘉納治五郎氏は、爾來、職員と同心協力して、校務の改善を計り、曩には、研究科の規則中に於て、最も、物議多かりし私費生選定の制を除き、次で、英語、及和漢文學二科の專修科を新設して、來十月より開講と定め、現に、生徒の募集中なるが、今、又、舍監の數を增して、寄宿舍を改良し、大に、人物の養成に務めんとすといふ。由來、高等師範學校生徒は、箱庭的人物、模型的人物、雛人形的人物のみにて、眞に、國民養成の大任を負ふに足るべき程のものを見ること能はず、これ、吾人の常に遺憾とせし所なるが、一面講道館に於て、武士的敎育の任に當れる嘉納氏が、進んで、師範學校に、人物養成を計らるゝ

事あれば、吾人は、確に、其の成功を信じて、更に一層の奮勵を同校長に望まざるを得ず。

●土人學校の認可　土人保護費中より、支出せらるべき授業料補給、殘額により、北海道膽振國虻田郡虻田村に、土人學校を新設せんとて、豫て、文部省に申請中なりしが、同省は九月五日付を以て、指令を與へたり、左れば、北海道廳は、新設費一千圓を以て、直ちに、校舍の新築に着手し、本年度に於て、虻田白老の兩所に設置する筈なり。

●北垣男銅像の碑文　北垣男銅像建設の事は、既に報道せしが、今、其の碑文を得たれば、左に掲ぐべし。

従三位勲三等男爵北垣國道君爲京都府知事也主講水利疏論都下人士起琵琶湖水之工自明治十八年八月至二十三年四月告竣疏鑿三里導流一道而水力之用運輸之利極大矣於是衆議頌其功徳謀鑄君像立于水上以表永遠慨慕之意云

●ベルツ博士歸任　昨年來、本國獨逸に、賜暇歸省中なりし、ベルツ博士は、去る六日、無事本邦に歸任し、直ちに、永田町の邸に入りたるが、翌七日は、日光に赴きて、田母澤御用邸に、皇太子殿下の御機嫌を奉伺し、同夜歸京したり。

●戸塚軍醫總監　退役海軍軍醫總監從三位勳二等戸塚文海氏は、舊静岡藩士、天保十年に生る、夙に、海軍省に出仕し、明治九年以降、海軍中軍醫、大軍醫、軍醫少中大監を經て、總監に陞進し、此間、東京海軍病院長、軍醫局長、海軍衞生會議議員等の職に在りて、十八年十二月後備役となり、翌年、愛國生命保險會社長に推され、其後、退役となり現今、仍、社長たり、偶、病に罹り、去る九日午後五時二十分、東京京橋區本材木町の自邸に薨せり享年六十四。

●馬の夏帽　近來市中の馬車馬に、編笠を被せたるは頗る異様にて、滑稽の感あれども、去月廿九日

在倫敦の品川畜産課長より、農商務省へ送り來れる最近刊行一雜誌中には、馬に夏帽ある一節ありて、委さに、最近流行の新形を紹介したり、尤も、暑中馬に麥稈帽子を戴かしむるは、先年來、歐米各國の都市に於て流行し、敢て珍しからず、殊に、富豪家は、意匠を凝して、種々の新形を作り、之に絹糸の房、又は、派手やかなる色合のリボンを附けて、驅廻るを見ると云へり。

●●●●●

●米作豫想公報　農商務省が全國各地農事試驗場の報告に基づきて、調査せる本年米作の景況、及、各府縣より同省に達したる收穫豫想額の報告は、其の都度之を紙上に公けにせしが、同省は、今回、更に、各府縣の報告に基づき、收穫豫想の調査を爲し、之を、本年の第一回豫想報告として公けにしたり、此報告に依れば、本年の總收額は、四千四百五十五万百石にして、昨年に比し、三百八萬三千三百六十六石（六分九厘强增）平年に比し、四百七十一萬五千六十二石（一割六厘增）の增收なり、尙は、各地方に於ける收額比較は左表の如し。

道府縣	卅四年度豫想		卅三年度に比し		平年に比し
東京	三三三、〇三六	增	二三、八五四	增	三〇、二〇三
京都	八一五、四九八	同	三二、三六四	同	七三、七九三
大坂	一、三〇六、八七九	同	三三、八六三	同	三九、七五七
神奈川	三九八、四〇二	同	四五、六七九	同	四二、六六七
兵庫	一、六八八、八〇七	減	二三八、二〇七	同	二四、九五
長崎	三六二、三七七	增	五六、三二四	同	一八、五三八
新潟	二、六五一、三三三	同	三〇一、一六八	同	三六二、二三六
埼玉	八九五、三三三	減	三三七	同	一七、五五三
群馬	四四四、九四〇		……	同	一一、七〇三
千葉	一、五八六、一〇四	增	一五四、四三五	同	三五、五四一
茨城	一、二八七、七三〇	同	五二四、五四四	同	一二四、五四九
栃木	八四三、八七一	減	一、六八八	同	五八、八八六
奈良	六六四、〇五五	增	八一、二四七	同	六三、六四四
三重	一、一八五、五三一	同	四〇、八九六	同	五三、七三五
愛知	一、八二三、六八三	同	九〇、〇八八	同	三〇、六八一
靜岡	八八一、四一一	同	一四六、六九四	減	一二七、一一四
山梨	三四六、一五〇	同	一六、四八三	增	八、九一四
滋賀	一、一五二、一四五		……	同	七四、五一三
岐阜	八五〇、〇〇〇	減	一三三、〇七九	同	三二、五四一

長野	一、一九二、七七七	同	六六、六九六	同	三五、一二五
宮城	一、三四六、八〇〇	增	七六、〇〇六	同	一三〇〇、〇三五
福島	一、三六八、八二四	同	五八、九四九	同	八九、二七九
岩手	六四六、六九一	減	一二、一五七	同	九、九六五
靑森	七九五、〇八六	增	一二六、一八六	同	六五、三三八
山形	一、九三三、九三一	同	一三五、三三四	同	三〇〇、七八四
秋田	一、三〇六、〇六二		……	同	五、五六一
福井	八七六、八八三	增	一六五、七六二	同	二六八、三七七
石川	一、〇七〇、七三三	同	一三九、六六〇	同	一五七、九九五
富山	一、五八九、九〇二	同	二〇七、三六八	同	一三九、三二四
鳥取	五二九、六六五	減	七、二四〇	同	一〇、三五二
島根	七二七、九七一	增	四四、三三六	同	一三、三〇五
岡山	一、四四一、五五二	同	一四三、三五一	同	三〇四、九五九
廣島	九三三、〇〇八	同	五四、三七二	同	三七、五二四
山口	一、一二八、七三三	同	一四六、九〇九	同	四四、七三四
和歌山	五一三、九六六	同	八七、一九五	同	六五、二三三
德島	六九二、六九二	同	七五、一九六	同	八八、三五七
香川	六九四、四九八	同	五〇、七三三	同	一七一、九八〇
愛媛	六六四、三三六	同	九五、二三五	同	六六、八五三
高知	六二七、九八七	同	一六一、八七二	同	一二九、八四五
福岡	一、五二〇、一二〇		……	減	六〇、一九三
大分	六八七、七二〇	增	一〇五、六八五	增	四三、七二三
佐賀	八二七、一八二	同	一六五、八一〇	同	三七、三六三
熊本	一、一二七、八六四	同	一三一、八八七	同	三三、二〇六
宮崎	五七三、八二九	同	九六、七七七	同	三九、二一六
鹿兒島	七〇〇、八三三	減	七七、八六九	同	四、四四六
沖繩	四三三、三三九	增	九、〇九四	同	四、三六三
北海道	一三一、八六〇	同	一一、九八七	同	六六、一三〇
計	同四四、五五〇、一〇〇	同	三、〇八三、三六六	同	四、七〇三、〇六二

●旅順大連在住の日本人　近頃、浦鹽斯德等より移りて、旅順口、大連灣に向ふ本邦人六百に達し、其の內、旅順口に於けるもの四百廿二人、大連に於けるもの卅人、其の他は、靑泥窪にあり、其の職業別は種々あれど、最も多數なるは、例の貸席、料理店等にて、旅順に在る同營業、女百五十三人、男四十二人、大連女十五人、男七人ありと。

●新造中の淸國軍艦　淸國は、廿七八年事件に大打擊を受け、艦體殆ど全滅の姿ありしが、近頃海外にて新造せる軍艦、追々回航し來り、今や、五萬噸に近き海軍力を有するに至りたるが、目下、尙、建造中なるは、英國にて一等巡洋艦一隻、獨逸にて、二等巡洋艦二隻にして、其の名稱噸數幷に、武器等、左の如しと云ふ。

一等巡洋艦　海濟

噸數四三〇〇、速力二三、長三九〇呎、幅四六呎、喫水一六呎八吋砲二門、四吋七速射砲砲十門、三封彈丸十二機關砲十門水雷發射管五門

二等巡洋艦　海鎭及海勝

噸數二、九五〇、速力一九、半長三二八呎、幅四一呎、喫水十六呎、四吋六吋クルツプ砲三門、四吋七速射砲八門機關砲六門小艇川砲一門水雷發射管三門

●小兒蝗の爲に殺さる●●●●●●

印度ベハール、ヘラルド新聞の報ずる所に據れば、去月同國モンギール地方に、數日間、蝗雲集して、耕地は、非常なる害を被りたる由なるが、其際、一人の農婦は、幼兒を抱きて、耕地に在りたるに、突然、蝗の群の飛び來るに會ひ、狼狽して、幼兒を捨てたる儘逃れ去り、暫時して、耕地に赴きたるに、幼兒は、蝗に食はれて、骨のみ殘り居たりと云ふ。

●防火性床板の發明●●●●●

獨逸の或る化學者は、鋸屑に、一種の藥品を混じて、防火性を有する床板を發明したる由なり、此床板は、大理石、又は、コンクリートの如く堅く、且、滑かにして、然も彈力を有し、冬季と雖も、石の如く冷ゆる憂ひなく、又、幾年を經過するも、毫も足音の響くことなし、又、尚、濕潤せる狀態に於て張るを以て、張り方は、頗る自在なりとす、尚、又、衛生上有利なることは、四十八時間内は、乾燥することなりと。

●自動車にて北極探險●●●●●

北極探險のため、近々、トロムソーに向け、米國を出發する筈なるボノトウイン探險隊は、五馬力のドゴイーユ式自動車を携ふる由にて、目的地に到着後、此自動車に依りて、探險の目的を達せんとすと云ふ、ボードウインは、曾て、一千哩の自動車旅行を試みたる人なり、又、此探險隊は、ギーゲルと云ふ人の出資に依りて、編成せられたるものなるが、三隻の船

を有し、三年間の食料を携へ行く筈にて、寒帶地方に必要なる物品は、盡く、之を具へ、居るとなり。

▲普魯西鐵道に女子を使用す●●●●●●●●●●　獨逸の鐵道局にては、頃日來、女子を種々の業務に使用し居れり其重なる業務は、鐵道切符の賣渡、事務電信、及び、電話事務貨物運搬、記入事務等にして、タイプライターは、從來より、女子の專業に屬したる由なり。俸給は、比較的少額にして、最初の一年は、七百二十馬克(凡そ三百六十四)にして、二年目には、六十馬克の增俸を爲し、三年目には、九百馬克(四百五十圓)の年俸を與ふる規定なりと云ふ。

▲自動車の速力●●●●●　曩に、巴里伯林間の自働車競爭ありたる際、自動車の速力、最も大なるものは、一分間、二キロメートル、即ち、一時間に七十哩を走り、稍遲きものは、一時間、八十乃至九十五キロメートル、即ち、五十乃至六十哩を走りたる由にて、此の如き、速力に在りては、乘者は、左右を顧みるの暇なく、其健康は勿論、大に害あるべきものは、乘者の隨意なりとして、道路步行者の危險、謂ふばかりなければ、右の諸國にては近々、速力制限法を設けらるべしとなり。

○落葉籠

投稿の規定

一、字体は楷書に限る、但し漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ふべからず。

二、文体は投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰、五行內外の事

但し可成はフリカナを附けて貰ひたし

三、誌上の匿名は差閊なけれど便宜の所へ必らず宿所姓名を明記すべし

四、記事は隨觀隨目何にてもよけれど有益にして興味あるものを望む

な、一切期限は、目次兼題の歌文と同日の事。用紙は半紙尤もハガキにてもよし

▲岡山、藤琴雌子曰、　貴誌第二百三十五號の論文、即ち細川ぬしのものされたる、彼の萬物萬事を整理することを論ずてふ記事は、妾等女子に取りては、誠によき敎へであります。とうぞ此の後もあの樣な有益な記事を出して、戴きたいものであります。

▲東京、なでし子曰、　私は、女鑑を最も愛讀致して居ります、然して、御投書なされる諸嬢の御芳名ばかりとは、久しい以前から、深い御馴染に成つて居ますが、親しく御目にかゝらぬ事を非常に殘念に思ひますが、何卒して、月に一回位ひ御會合して、親しく御交際の出來る樣な工夫は御座いますまいか。記者足下及び諸嬢に御相談申します。

▲記者曰、　なでし子孃の發言につき、讀者諸媛は、如何御考へられますか、先づ、其の贊成か、否かを御聞かせ下さいませ。

▲大阪、木村文子曰、　武藏の愛花子樣とおなじく、女子矯風問題に付きて、記者足下の御高說をうけ玉はり度ぞんじます。

▲長崎、栗岡秋子曰、　私の妹は、今年十歲ですが、宅で腕白ばかりして困りますが、とうしたらおとなしくなるでせうか、姉樣方をしへて下さい。

▲三河、永井房子曰、　私も貴誌の口繪につきては、水野花子さんの御說に贊成ですから、是非御願申ます。

▲東京、はる子曰、　私は、去にし十一日の人民新聞を見ましたら、覆面女學生納豆賣りの苦學談が、ありまして、その方は、湯島切通の某女學校へ通學して居なさると書てあります。それは〳〵誠に感心な方で、私も二三度その姿を見まして、

覺えず泣きました。記者の君よ、其の顚末を誌上へかゝげて、私等女學生の戒めとして、下さいませ。

▲記者曰、　はる子姉よ、御身もしかく思ひ玉ひしか、記者も又少なからぬ同情をよせたり。されど孝女却て痴情のために、老母を置き去りにした近きためしもあれば、猶よく取りしらべの上、表彰録にかゝげて永く女學生の好模範として、傳ふべし。

▲記者曰、　渡花子さんに御答申ます。確實なる高等女學校で、主義のよい入費の安い學校を御望みなれば、是非本郷區龍岡町の日本女學校へ入校なさるを御勸め申ます。なぜならば、該校は、我が女鑑主義を以て建てられた學校ですから。

▲北海道、雪子曰、　第二百三十六號の口繪、富士川の眞景は、まことに能く出來てをりますこと。

▲東京、秋草女曰、　私は、心のはなと云ふ雜誌を見たいとおもひますが、どこで賣りますか、一寸敎へて下さいまし。又、此度の兼題和歌の撰ひかた、甲乙丙も至極けつこうですが、雪月花など云ふ名にした方が、優美に見えはしませんか、思ひつきのまゝを申上げます。

▲記者曰、『心の華』は、到る所の書店にありますが、其の發行所は、京橋區東豐玉河岸大日本歌學會です。それから、兼題和歌の區別名稱は、何れにしてもおなじく、ありふれたる名稱ですが、先づ暫く御説に從ふ事としました。

▲日向、梅子曰、　私は伊豫まつ子さんの御心がけを感心いたしました。例へ、いかなる病にかゝられても、一度夫と定めた以上は、終始心をかへぬのが、正しき女の道と思ひます。

▲東京、篠田圓子曰、　兼題短歌の天地人以下を、

甲乙内にわける事にして下さいましたのは、至極賛成でございます。さて、かやうになりますと、甲が是迄の秀逸で、乙が佳調とでも、申のでしやうか。

▲記者曰、　御說のとほりで御座ります。

▲肥後、谷清子曰、　山岡ぬしの後樂園拜觀記、能々眞況を盡され、妾の如き一度拜觀せしものには、一入の風情、胸にわきいでゝ、まのあたり見る心地がします。實は第二百三十六號の女鑑を待ち兼ねて居りましたのに、御出しになりませぬので、誠に力を落しました、どうか引き續き出して頂きたいのでございます。

▲螢雪子曰、　後樂園拜觀記、及月の異名の稿を續んければなりませんが、病氣の爲め遺憾ながら暫時休戴するの止を得ぬ場合になりましたから、谷清子孃をはじめ、讀者諸媛諒してよ。

▲岡山、水野花子曰、　松柏子樣の御問ひであります、御父樣の御遺產を、公共事業に遊ばすには、養育院とか、又は孤兒院の樣な所へ御寄附なさるが、よかろうと思ひます。

▲岐阜、田村そふ子曰、　拜啓御社益御繁榮のだん奉賀候。さて下野兼子樣の御問にて、高等看護婦規則書出來次第御送り給ふよし。甚恐入候へども、妾にも何卒御送り下さるやう、奉願上候。

▲記者曰、　委細承知仕り候間、御安心下され度候。

▲東京、青木女史曰、　長門みどり子さんの御問ひある、衣服の奥裏と、裾廻しとの縫ひ合せの折り方は、おくうらの方に返すのが普通であります。長襦袢の襟巾は、全體三寸巾の廣襟と、襟肩の廻にて一寸五分、裾口のところにて一寸七分位になして、斜になして仕立つるものと、二通りありま

す。

▲北海道、波花子曰、　貴誌に度々廣告があります、日本女學校の月謝及び寄宿費は何程でありますか、又、高等小學卒業生は本科へ無試驗ではいられますか、をしへて下さいまし。

▲記者曰、　御問の日本女學校の月謝は目下金一圓五十錢で、寄宿舍は二ヶ所にありまして、幹事宮島先生と、教授師岡先生が其の主人とあり、寄宿生は、皆家族として教導せられつゝあります。費用は、月謝金一圓と、食費金五圓五十錢ださうです。又本科一年級へは無試驗で入學が出來ますが、編入試驗に及第すれば、本科第三年級までには、入學ができるさうです。

▲記者曰、　同人益尊子先頃より腦神經をおやみて、ます〳〵善からず。爲に醫師の勸めを入れ、去ぬる日郷里高松市へ向け靜養に赴かれたり。我等は一日も早く上京あらん事をまつ。

▲尾張、武島光子曰、　私は初めて貴誌第二百三十六號を拜見しまして、名の如く實に、女子の龜鑑となるべき好師友とぞんじ、切に次號をまつて居ります。付ては甚だ恐れ入りますが、其の主義本領を承はり度いので御座ります。

▲記者曰、　それは、次ぎの一文を讀でいたゞけば、よく御分りになる事とぞんじます。即ち、

女子教育の盛なること、今日の如きは無きと共に、女子が品性の墮落せる、亦、今日の如く甚だしきはなし。然れども、東洋の君子國、秀麗端正なる婦道、自然に存す。之を涵養し、之を發揮し、以て、貞淑賢良の婦女を養成し、雄大忠誠なる國民の慈母たらしめんことは、是れ女鑑が、年來務めつゝありし所なり。今や國運の進歩に伴ひ、益益誌面を改善し、大に記事を精選し、以て、圓滿

ある婦道の指南車とあり、世好と、時流の表に卓立して、誠心誠意婦女品性陶冶の責に當り、以て、我が本領を貫徹せんことを期す。

▲記者曰、神戸中濱利子嬢をはじめ、讀者諸媛に注意しておきますが、収入印紙は、例へ三銭の額をはりましても、郵便切手　代用はゆるしません。ですから未納税を徴収せられます。又、當時流行の繪はがきに、通常はがきの切手の所を切りぬきて、はつても、其の効はありません。ついでに申して置きますが未納郵便物は、以後決して受取りませんから、差出す節は、各々御注意を願ひます。

▲東京、渡邊美都子曰、　わらは事、小學を卒業いたしてより、一家の事にいそがはしく、讀書などには、いとも縁遠く候。その上、父上よりは、當時の新聞などは、嚴しく讀むことを禁ぜられしまゝ心の樂としては、女鑑のみに御座候。こゝに一ッの御願と申すは、家庭にて讀むべき、短篇小説に御座候。友達よりも、いろ〳〵小説本貸くれ候へども、いづれも父上の御氣に召し申さず。今頃の小説家とやらの書きしものは、其の方たちの讀むべきものにあらずと、御諭し相成度候。秋の夜のつれ〴〵に、ものさびしう存候へば、わらは等の教訓と相成べき、まじめなる小説を、引きつゞき御掲載のほど所望に候。くれ〴〵も御願上まゐらせ候。

○口繪につきて

●群芳　豫告の如く、去にし七月、華族女學校卒業生ある、徳川、橋元、野村、牧野の四嬢がものされたる可憐の筆、艶麗の作、あはれ、菫の床の雉子、むつまじく遊べる春もすぎて、夏のあつさ、

緑濃き庭面に出て、泉水に浮きつしづみつ楽しげある金魚を見、或は、親しき友どち打ちつれて、木影に憩ひ、遠山にたなびく紫の雲を眺むるも一入涼しく、されど、又、露に秋めきたる今日このごろ、萩の花の枝いと重げに咲き亂れ、そよ吹く風に淋しげなる、鶉が聲もいとゞ身にしむ夕まぐれ、實に物の哀は秋ぞまさると人ごとにいふめれど、何れをとらぬ姫方が筆の床しさ、いとゞ目出度き極みにこそ。

●紫式部　記者先つころ、嘗て鎗術の師範役として、當時其の驍名を海内に轟かし、夙に大義を重じ、王政維新の際の如き、能く將軍慶喜公を保護し、以て速に恭順の意を表せしめ、勝海舟、山岡鐵舟等と共に、主家をして今日あらしめたる、彼の高橋泥舟翁を牛込の邸に訪うて、特に諸媛のために乞ひ受けたる揮毫なり。あはれ一代の才媛紫式部の人となりを歌ひてあますなく、其の歌の高妙なると、其の書の遒健にして奇韻多趣なるとは、共に誌面に躍如たり。翁は、實に山岡鐵舟居士の義兄にして、勝海舟居士と友とし好し。共に幕末の英俊なり。故に、世稱して德川の三舟といふ。されど、世人皆山岡、勝を知りて、翁の人となりを知らざるは、記者の常に遺憾とせし處、因て玆に、新潟の人小林二郎氏がものしたる翁の小傳を介し、以て諸媛に呈すること爾り。其の傳に曰、

高橋泥舟居士名は政晃字は寛猛幼名は謙三郎通稱は精一泥舟と號す東京の人世幕府に仕ふ居士は山岡靜山先生の實弟なり出でゝ高橋家に養はる是を以て其姓を冒す靜山先生は當時鎗術絶妙天下第一たり其門生に教授する實に嚴正を極む然して其門に入るもの千を以て數ふ熾なりと云ふべし又先生は重朴德行を以て聞ふ二十七歳にして沒す時人痛悼して以て惜まざるはなし居士其後を受け續きて門生に教授す亦嚴正を極む居士は文武兩道に達し實に希世の偉人なり就中鎗法神妙海内無

双たり居士歳二十二にして講武所の教授に擧げられ歳二十五にして天下の師範となる歳未だ壯年ならずして天下の師範となる者幕府に於て前古未だ曾てあらざるところなりと云ふ是を以て威名一時に振ひ雄風時人を壓す終に　叙閉に達し特に從五位下朝散太夫伊勢守に任ぜらる居士は幕府の忠臣たりと雖も尊王攘夷の志最も深し是を以て諸藩の士居士の雄威を慎むもの多し居士夙に見るところありて麾下の士中より同志の士を聚むること五百餘人あり中條金之助、山岡鐵太郎（本姓は小野なり居士實兄の沒後門生中より擧て實妹英子に娶はす是を以て山岡を冒す）松岡萬、關口隆吉、大草多喜次郎等是其巨魁たり幕府諸浪士を徵集し名けて新徵組と云ふ七百有餘人あり松平上總之介に屬せしむ諸浪士服せず轉じて鵜殿鳩翁に屬せしむ又服せず諸浪士上書して居士に屬せんことを請ふ是を以て幕府特に命じて居士に屬せしむ是に於て諸浪士悅服すること甚し清河八郎、石坂周造、村上俊五郎、池田德太郎、大館鐵三郎等是其領袖なり源將軍家茂公特に居士を愛重せらる居士狀貌快偉稟性剛直其國事を論するに當りては天下の閣老と雖も一步も假さず況んや其餘をや故に動もすれば幕吏の嫌疑に觸るゝこと其幾返なるを知るべからず居士をして其志の萬一を伸べしむる能はざるものは幕府の仆るゝ先兆にして所謂天命と云ふもの歟後幕府大擧して長藩を征討するに當りて居士其不可を論すれども聞かれず剩さへ嫌疑を受け蟄居を命ぜらる時に詩あり人口に膾炙せり源將軍此詩を見て近侍に謂て曰く高橋は唯一個の武人なりと云へり豈に圖らんや又詩文を屬せんとは而して其の演ぶるところ實に忠直なりと云ふべしと不幸にして源將軍大坂城に薨ずるの後慶喜公其後を續ぎ又居士を起して遊擊精銳兩隊の總督たらしむ是幕府土崩瓦解の時なり慶應戊辰の春伏見戰爭の後慶喜公朝敵の名を得て江戶城に歸る居士此時江戶にありて幕府が曾て將軍職を辭し政權を失なひたるを喜ふるに今又其敗を聞き愁然として曰く嗚呼幕府將に仆れ國家將に亂れんとす此時に當りては唯王家に恭順して以て人民を安穩ならしめんには加かざるのみと單騎にして本城にいたり公に拜謁せんことを請ふ如此すること七日近侍の妨ぐるところとなりて果さず此に於て居士慨然として曰く大厦の仆るゝ一木の支ゆる所にあらず嗚呼又如何ともなしがたしと然れども獨り坐視するに忍びず閣老小笠原壹岐守に謁し上書して公に拜謁を請ひ談論數刻に及んで閣老其言に感動の涕涙すること稍久ふして曰く公が言極めて善し余直に之を上聞に達せんと云ふ而して亦果さず居士亦慨然として血涙頤に垂る後數日を經て召あり公特に居士を召して曰く、予歸城の後既に十餘日を經れども汝來りて事を問はざるは何ぞやと居士對て曰く是は意外の事なり臣過日伏見の敗を聞き公が歸城せらるゝと聞や國家の大事此の時なりと起て單騎にして公に拜謁を乞ふこと七日にして果さず慨嘆止

む能はず此故以上審して閣老に謁し拜謁を請へども亦果さず臣獨り血に泣くのみ今日圖らずして召さる知らず何事ぞやと公愕然として曰く予之れを知らず唯汝の來らざるを怪しむのみと時に公居士に命ずるところあり終りて居士公に說て曰く方今世間の勢を觀察するに人心離散して一定す可らず今日臣が愚見を以てすれば其の急務とする所は唯王家に恭順して以て中原に干戈を動かさず人民をして塗炭の苦みを受しめざるを以て得策となすのみ若し然らずんば臍を噬むとも及ばざらんとすと然りと雖も公未だ決せず有栖川總督官軍を率ひ將に東下して罪を幕府に問ふに到らんとして公漸く決す居士勝安房と謀り自ら遊擊精銳の兩隊を引率し公を護衛して上野寬永寺に退去して以て恭順の意を表せしむ勝は本城に留守して後事を圖らんとす後而して官軍の駿府に來ると聞くや公居士に命じて直ちに駿府に到らしめ恭順の意を貫徹せしめんとす然るに麾下の士幕府が先に薩長士等の士に售られ政權を失なひ而して今剩さへ朝敵の汚名を受けたるを憤り恭順を欲せざるもの尤も多し是を以て動もすれば公を奪ひ去りて事を擧げんとするもの比々皆然り公大に之を怖る唯居士の雄威を恐てこれを敢せざるのみ是れ居士の公を護衛する所以にして又勝の本城に止まるは官軍の參謀西鄉隆盛等と友とし好き所以なり公既に居士に命じたれば居士其命を奉して公前を退き將に發せんとす公又遽かに居士を召し返して即ち曰く汝去らば豈に麾下の士を大に煽動する者なきを知らんや汝にあらざれば予が命を全ふするものなく今汝去らば麾下の士を鎭定するものなし嗟噓此時に當りて予汝が身体の二なきを憂ふるなり今汝に代りて此使命を全ふするもの予に於て誰を指さす所なし汝が見る所これあるや否やと公愁然として潸涙交々是に於て居士即ち曰く諺に曰く子を見ること親に如かずと今麾下の士を見るに尊命を全ふする者臣の愚弟山岡鐵太郎に如くものなし知らず公之に命ずるや否やと公漸く涙を拭ふて曰く汝の言既に如此予豈に命せざらんや汝直に命を傳へて疾く去らしめよと居士曰く此一大事を命ずる豈に輕易のことならんや公役を召し親しく命ずるには若かざるなり君命重からざれば事をなす能はず若し誤りて此命を辱しむるに至らば駟も亦及ばずと是に於て公遽に山岡を召して直に之を命ず山岡命を奉じ勝と謀りて薩藩增滿久太郎を將ひて駿府に到り參謀本部に於て西鄉に謁し來意を演べて曰く主人慶喜今回先非を悔悟して王家に恭順せんとす其實をあらわさんとて既に已に身自ら寬永寺に退居して唯官命を是れ待つのみと問答すること稍久ふして西鄉其說を容れ事即ち決す此時榎本鉄二郎、大鳥圭介、松平太郎等の士憤激自ら禁せず將に事を擧げんとす公之を聞き太に之を憂ひ居士に命じて之を諭さしめて曰く而今公等君の爲めに事を擧げ忠を竭す其志實に好みすべし然るに今日譜代恩顧の ものと雖ども日に月に背戾するもの多し又麾下の士

と雖も其心測るべからず然れば其事の成らざるは鐵に懸て見るよりも明かなり而して事を擧るは猶ほ刃を以て君の腹に加ふるが如し之をも忍ぶべくんば孰れをか忍ぶべからざらん公等幸に之を省せよと榎本等之を聞くと雖も唯々として未だ決せず明朝に到りて其答をなさんと云ふ居士則ち去る其夜榎本等甲鐵艦の諸艦を率ひて脱走し去る公慨歎措くところを知らず夫より居士兩隊を將ひ公を護衛して水府に行是れ世人徳川に勝、山岡あるを知りて居士のあるを知らざるに至る所以なり此より先き居士自ら謂らく而今吾公の護衛の任に當れる非れば能はざる内情あるも是れ即ち天命なり吾家幕府三百年の鴻恩に報ゆるの秋自然にして至れるなり縱令此の任を終るも豈に浮雲の榮華を求めんが爲めに又世に出でんやと居士終始其志を變せず淸貧を甘んずること二十五年猶一日の如し嗟然幕府土崩瓦解して收拾すべからざるに及んで智謀夷平に過ると雖も亦如何ともなし難きときに當りて居士獨り立つて恭順を首唱して以て主家を全ふせしめ而して中原に干戈を動かさざらしむ嗚呼其功偉なりと云ふべし居士の忠節は武田の小宮内膳に比すべくして其功業高く其上に出づ是れ神祖の餘勳未だ泯せざるに因るもの歟孔子曰く人之を知らざれども慍らざる亦君子ならずやと是居士の謂乎

嗚呼（あゝ）、山岡、勝の二舟既に幽界（いうかい）の人となり、今は僅に一舟を存するのみ。希（こひねがは）くは、翁自愛し以て、永く後進（こうしん）を導（みちび）くの勞（らう）を吝（をし）むなかれ。（山岡超舟）

○新刊寄書

偕行社記事	第二百七十一、二、三號	東京　偕行社
兒童研究	第四卷第四號	東京　教育研究所
東京經濟雜誌	第千九十四、五、六、七號	東京　經濟雜誌社
大阪商業會議月報	第百一號	大阪　商業會議所
日本人	第百四十二、三、四、五號	東京　政教社
兵事雜誌	第十四、五、六、七號	東京　兵事雜誌社
教育公報	第二百五十號	東京　帝國教育會
宮城教育雜誌	第七十一、二號	宮城　宮城教育會
信濃教育雜誌	第百七十八、九號	信濃　信濃教育會
風調	第三號	島根　風調社
埼玉教育雜誌	第三百三十、三十一號	埼玉　埼玉教育會
大分教育雜誌	百九十七、八號	大分　大分教育會
日本弘道叢記	第百十二號	東京　日本弘道會
下野教育	第百七十六號	栃木　下野教育會
東京市教育時報	第拾一、二號	東京　東京市教育會
大阪教育會報	第百八十、一、二號	大阪　大阪府教育會
法政新誌	第四十九號	東京　法政學會
高知教育	第百拾號	高知　高知教育會
日本濟美會雜誌	第五號	東京　日本濟美會
京都教育雜誌	第百七、八、九、十一、十二號	京都　京都教育會

少年世界	第十二號	東京	博文館
合德	第六號	東京	合德會本部
なんな	第七號	東京	大日本學會
女學雜誌	第五百十二號	東京	女學雜誌社
偕行社記事	第二百七十一、二號	東京	偕行社
ほつま	第十七號	備中	金光中學秀眞會
日州教育雜誌	第二十七號	宮崎	日州教育會
日本赤十字	第百一號	東京	日本赤十字發行所
使命新報	第三十一號	東京	使命新報社
外交時報	第四十一號	東京	東京專門學校
宮城教育雜誌	七十一號	宮城	宮城教育會
兵事雜誌	第十四、十五號	東京	兵事雜誌社
日本人	第百四十二、四號	東京	政教社
眞信	第四十四五號	愛知	眞信會雜誌部
あけぼの	第三號	東京	姬百合社
日本婦人	第二十一號	東京	帝國婦人協會
神道新誌	第六十五、六號	東京	神道新報社
家庭	第七號	東京	大日本佛教婦人會
日本倫理史稿		東京	開發社
家庭の新涼味一		東京	內外出版協會
明義	第七、八、九號	京東	明義雜誌社
岡山教育雜誌	第四十五號	岡山	岡山教育會
千葉教育雜誌	第百十二、三號	千葉	千葉教育會
女子のとも	第六十六、七號	東京	東洋社
東京經濟雜誌	第千九十四號	東京	經濟雜誌社
水交社記事	第百廿九、三十號	東京	水交社
東京教育雜誌	第百四十號	東京	東京教育會

鹿兒島教育雜誌	第九十二號	鹿兒島	鹿兒島教育會
心の華	第七・八、九號	東京	大日本歌學會
大八州雜誌	第百八十、百八十一號	東京	大八州館
女學雜誌姬百合	第四卷第一號	東京	姬百合社
愛國	第七十八、九號	東京	愛國社
國學院雜誌	第七卷第七、八號	東京	國學院
長崎教育雜誌	第百七、八號	長崎	教育舍
兒童研究	第四號	東京	教育研究所
教育公報	第二百五十號	東京	帝國教育會
島根教育雜誌	第百七十六號	島根	島根教育會
愛媛教育雜誌	第百六十八號	愛媛	愛媛教育協會
山形教育雜誌	第百三十五、六、七號	山形	山形教育社
上野教育雜誌	第百六十六號	上野	上野教育會
紀伊教育	第百一號	紀伊	紀伊教育會
教育	第十八、九號	東京	茗溪會
菅公の歌		東京	上田屋書店
曾我兄弟歌		仝	仝
菊水旗		仝	仝



女鑑

明治三十四年九月廿日發行　毎月二回五日廿日發行　第貳百參拾七號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地二丁目株式會社國光社印刷部印刷